

<平成29年度修士論文（静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科）>

失われた風景文化を再現する東海道宿場町の試み
— ケヴィン・リンチの思想から —

Attempt of Reappearance on the Lost Landscape Culture
in Three Stations of Tokaido : Using the Thought of Kevin Lynch

大上 美来 Miku OKAMI

(論文指導：静岡文化芸術大学教授 松本茂章)

目 次

要 旨	1
第1章 研究の目的と問題の背景	3
第2章 風景文化の破壊と保全	8
第3章 品川宿における風景文化の再現	14
第4章 川崎宿における風景文化の再現	22
第5章 保土ヶ谷宿における風景文化の再現	30
第6章 ケヴィン・リンチの思想に基づく分析	38
第7章 失われた風景文化を再現する条件	43
参考文献	51
図 表	54

要旨

本研究の目的は、宿場町の歴史性を活かしたまちづくり活動の実態を浮き彫りにしつつ、失われた風景文化を再現するための条件を明らかにすることである。本研究における風景文化とは、有形の文化財だけでなく、伝承、記憶、心象風景、食文化、あるいは近年に行われている建物の修景を含めた幅広い動きのことを指している。

歴史的な風景に対する保全制度は整えられてきた。ところが、未だに文化財ありきの優品主義や、建物が重要視されるハード主義の傾向にある。住民が形成・伝承してきた遺産や人々の記憶が想起される場を、歴史を活かしたまちづくりの観点から取り上げ、新たな保全策を示す必要があると考えた。このためには、日本が歩んできた歴史的風景を壊してきた歴史を振り返りつつ、近年、行われてきている風景文化の保存の法整備や施策を検証する。

分析の視点として、米国の都市計画家ケヴィン・リンチが1960年に提唱した環境イメージを構成する3つの成分を用いる。リンチによると、都市のイメージは「アイデンティティ」「構造」「意味」の3つの成分で構成される。本研究では、アイデンティティを「地域が宿場町であった価値を認識すること」、構造を「宿場町の空間」、意味を「宿場町にまつわるエピソード」と置き換え、分析を試みた。この視点をもとに、宿場の人々が自らの地域イメージをいかに変容させていったかを浮き彫りにし、失われた風景文化の再現につながる条件を提示したい。

本研究で取り上げた事例は、東海道五十三次のうち、品川宿、川崎宿、保土ヶ谷宿の3か所である。いずれも関東大震災や太平洋戦争の空襲、戦後の都市開発などの要因によって、歴史的な建築物が消失した地域である。

リンチの理論をもとにした3つの視点から分析したところ、失われた風景文化を取り戻すためには3つの条件が必要であることが分かった。①外部への発信、②地域固有の構造、③宿場町をめぐるストーリーの再構築である。歴史的建築物が存在しなくとも、上記3つの条件を満たすことができれば、失われた風景文化の再現は可能であった。

キーワード：風景文化の再現、都市イメージの変容、外部への発信、地域固有の構造、宿場町をめぐるストーリーの再構築

Abstract

The aim of this paper is to show the conditions for appearance of the lost landscape in three stations of Tokaido where are located in capital area, furthermore the author will have useful views on Act on Protection of Cultural Properties, Landscape Act, and Law on the Maintenance and Improvement of Historic Landscape in a Community. Their Laws do not fit to maintain their lost landscape. The author mean “landscape culture” including lore, memories, mindscape, cuisine, and so on.

Three stations, “Shinagawa-juku”, “Kawasaki-juku”, and “Hodogaya-juku”, around Tokyo and Kanagawa were chosen as case studies.

The author analyzes the environmental image of their case studies from three components: "identity", "structure", and "meaning", proposed by Kevin Lynch. In this paper, his three components were treated to “the thought of Kevin Lynch”.

Through a view from “the thought of Kevin Lynch”, changing the environmental image. In conclusion, appearance of the lost landscape needs three points. 1. To spread information , 2. Region-specific structures, 3. To rebuild story based on stations in Tokaido.

Keywords : appearance of the lost landscape , changing the environmental image , To spread information, Region-specific structures, To rebuild story based on stations in Tokaido.

第1章 研究の目的と問題の背景

1-1 研究目的と問題意識

本研究の目的は、宿場町の歴史性を活かした、まちづくり活動の実態を浮き彫りにしつつ、失われた風景文化を再現するための条件を明らかにすることである。ここでいう風景文化とは、有形の文化財だけでなく、伝承、記憶、心象風景、食文化、あるいは近年に行われている建物修景の試みなどを含む。これらの取り組みは、特に東京や神奈川などの戦後都市化が著しい地域におけるアイデンティティの再形成、コミュニティの再生、観光客の誘致などの共通した問題に寄与すると考える。さらに、失われた風景文化を取り戻す動きを検証し、風景文化のありようを見つめ直すことは、全国各地にある都市化した地域にも参考になり、まちづくりの教訓になると受け止めている。

筆者は学部時代から、わが国における文化財保護制度に対する疑問を有し、文化財の優品主義に対する揺らぎの気持ちをずっと胸に抱いてきた。優れた有形文化財があることが大前提となるわが国の文化財保護政策では、そのような文化財のない地域の住民は住んでいる誇りを得られにくいのではないか、という印象がある。そこで学士論文では、JRの駅舎を事例に、文化財に指定されていなくても、住民たちが誇りに思う都市風景の1つとして木造の駅舎に注目し、木造駅舎の保存運動を取り上げた¹。建物保存面の調査が中心となった学士論文をふまえ、本研究では、地域住民が大切に思ってきた風景文化にもっと焦点を当てたいと考えた。特に都市部に関心を持った。

歴史的な風景や景観の保全を通じたまちづくりの取り組みは、次第に増えてきた²。木原(1987)が明らかにしているように³、このような歴史的な町並みが増えた理由の1つとして、重要伝統的建築物群保存地区(重伝建地区)への選定ばかりではなく、住民たちが身近に感じる日常的な古い町並みを再評価して自ら保全運動を始めた、という事例も含まれている。加えて、地域固有の文化財を活用するまちづくりの手法は、1990年代半ばから確立してきているのだ⁴。歴史的風景の保全に対し、文化財の継承のみならず、住民の誇り形成やコミュニティ活性化等にも貢献するという認識が広がってきている⁵。このような保全活動は、京都や鎌倉のような歴史上重要な都市や、文化財が比較的残されていた川越や今井のような地域で積極的に行われてきた。

ところが、これらは神社仏閣などの建物(ハード)があつてこそその動きが大半である。文化財

¹ 2014年度静岡文化芸術大学文化政策学部芸術文化学科学士論文『官民協働からみる文化財保護制度—木造駅舎の保存運営を事例に—』

² 文化庁文化財保護部(1998)『伝統的集落における歴史的環境整備を中心とした地域活性化方策の調査・検討:報告書』文化庁文化財保護部建造物課, pp.14-15.

³ 木原啓吉(1982)『歴史的環境—保存と再生—』水曜社, p15.

⁴ 馬場憲一(2001)「日本における文化遺産の活用と地域づくり—1990年代の文化財政策との関わりのなかで—」『法政大学現代福祉学部〈現代福祉研究〉創刊号』法政大学現代福祉学部, pp.35-47.

⁵ 岡崎篤行(2006)「これからの都市計画と歴史遺産の保存・再生」大川直躬編『歴史的遺産の保存・活用とまちづくり』学芸出版社, pp.67-112.

政策研究者の馬場憲一によると、身近な「地域遺産」や⁶、遺跡や伝説地のような人々の記憶に想起させる「記憶の場」についても、市民の誇り形成に結びついていると述べている⁷。そして、これらについても、公益性がある地域資源として保護・活用の必要性を主張している。そこで本研究では、ハードすら残されていない地域における、風景文化を保全する官民協働の取り組みを取り上げたい。ハードがなくても、伝承、記憶、心象風景などを後世に伝えたいという取り組みは展開している。住民の誇り形成やコミュニティの再生に貢献できることを実証し、無形資産（ソフト）を活用するためには、どんな条件が必要なのかを考えてみたい。具体的に取り上げるのは、東京都品川区の品川宿、神奈川県川崎市の川崎宿、同県横浜市の保土ヶ谷宿の3か所である。理由は後述するが、いずれも街道沿いの宿場町は風景文化が残されにくかった地域だ。関東大震災や太平洋戦争の空襲、戦後の発展などによって歴史的なまちが崩されてきた共通性を有する。さらに近年、先に述べた風景文化をよみがえらせようという動きが、行政でも、民間でも見られる。この3つの地域は高度成長期にまちの破壊が進んだところでありながら、まちづくりに関する住民たちの心意気が高く、まちを誇りに思っている事例である⁸。

こうした歴史的町並みの保存継承の問題は、過疎化の著しい地方の課題と考えられがちである。実際、過疎化地域では、重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）の選定をきっかけに、観光客誘致などを図ろうとしている。対して本研究は大都市圏を対象とする。その点が本研究の独自性だと思われる。戦後一貫して人口が増加してきた首都圏では、過疎地ほど、町並み保全に取り組む意識がそれほど高くなかったのではなかったか。

以上のような風景文化に関する問題意識は、都市のイメージ論を抜きに語れない。筆者が影響を受けたのはケヴィン・リンチの古典的著書『都市のイメージ』（2007）である。詳しくは第2章で触れるが、建築家・都市計画家であるリンチによると、都市のイメージは、「たくさんの個人のイメージが重なり合った結果としての一つのパブリック・イメージが存在する」としている⁹。先述した伝承、記憶、心象風景などを後世に伝えたいという人々の気持ちや熱情と共通する面があるのではないか。

本研究では、建物があろうとなかろうと、都市部であろうと、田舎であろうと、集合的記憶がなくなることはなく、故郷あるいは住んでいる地域を大切に思う気持ち、あるいは懐かしく感じる気持ちは変わらないという前提で論を進めていく。

⁶ 馬場（2013）は論文内において、「地域遺産」を市民がはぐくみ形成してきた多様な文化的価値を有し、地域に伝承されているものと説明している。馬場憲一（2013）「地域主権実現のための自治体文化財政策について—新たな『文化財』概念の構築を踏まえて—」『現代福祉研究』法政大学現代福祉学部，第13号，pp.1-22.

⁷ 馬場憲一（2015）『「記憶の場」の形成と『歴史的環境』との関わりについて—勝淵神社の柴田勝家兜埋納伝説を事例として—』『現代福祉研究』法政大学現代福祉学部，第15号，pp.153-170.

⁸ 「歴史的町並み保全をめぐる横浜市保土ヶ谷区の試み—重層的ガバナンスの視点から—」第9回日本文化政策学会年次研究大会（2016年、高崎経済大学において）にて分科会発表。保土ヶ谷宿の取り組みを取り上げた。

⁹ ケヴィン・リンチ著，丹下健三・富田玲子訳（2007）『都市のイメージ 新装版』岩波書店，p55.

1-2 研究の方法と事例選定の理由

(1) 研究の方法

本研究では、文献調査に加えて、現地訪問と関係者からの聞き取り調査を行った。歴史的な風景の保全に関連する法律や失われた風景文化を再現する取り組みの現状と課題に関しては、書籍、学術論文や雑誌記事等の文献等を用いて情報を収集した。また、事例選定を行う前段階として、東京都、及び神奈川県に設置された東海道の宿場町に対して実態の把握を試みた。宿場成立年、宿場町の規模、歴史的な風景を保存する取り組みの有無等について、文献、新聞記事等を用いて情報を収集した。

事例として本研究で取り上げた品川宿、川崎宿、保土ヶ谷宿の3つの宿場町に関する文献調査は、行政や民間団体が発行した資料、郷土資料等の文献を利用して事実関係の把握や個別の活動について情報を収集した。文献調査に加えて、各地域で開催された社会教育講座、まちづくり協議会の運営委員会に出席したり、実際にまち歩きに参加したりして、参加者や関係者との繋がりを持った¹⁰。

(2) 事例選定の理由

風景文化が失われている地域の1つに、首都圏の宿場町が挙げられる。戦後から一貫して人口が増加してきた首都圏では、都市化、震災や空襲の影響で、過疎地ほど熱心に建物保存が行われてこなかったと推測できる。加えて、街道沿いの宿場町は、道路という実用性が重視されやすく、歴史景観として発展してこなかったこと¹¹、景観の核となるべきランドマークが存在していなかったことから¹²、風景文化が残されにくい傾向にある。そこで、首都圏に立地する宿場町を取り上げ、中でも東海道の3つの宿場町に絞り、事例調査を行った。

東海道の絞った理由は、次の3つが挙げられる。1つには、東海道は東京から京都に至る「東海道メガロポリス」上にあるからだ。都市化や工業化が激しく、わが国において最も開発が進み、歴史的な風景が残されにくい地域と推測する。2つには、江戸時代に整備された五街道のなかで東海道が最も重要な街道であったからである。参勤交代や伊勢参りなどの際に、政府役人から庶民まで幅広く利用され、沿道の宿場町が栄えていた。3つには、宿場町同士の比較が容易であると考えたからだ。東海道は、1601年（慶長6）から1624年（寛永1）までに街道整備が完成しており、宿場の構造に差がないと推測する。

東海道の宿場町のうち、東京都・品川宿、神奈川県・川崎宿、同県保土ヶ谷宿の3つに事例を絞った。理由としては、首都圏に立地する宿場町のなかで、比較研究が容易と考えたからである。東海道のうち、人口が最も多い東京都と神奈川県を対象に選び、53宿から10宿まで絞り込んだ

¹⁰ 例えば、2015年12月2日、保土ヶ谷区区制推進課主催の全四回の連続講座に同行して保土ヶ谷を歩いた。

¹¹ タン・M・A 著、三村浩史監訳、世界都市保全協会訳（2006）『歴史都市の破壊と保全・再生—世界のメトロポリスに見る景観保全のまちづくり—』海路書院、pp.509-511

¹² 例えば、近世城下町には城郭、環濠、武家屋敷などの景観を形成する上で核となっていた。三輪修三（1995）『東海道川崎宿とその周辺』文献出版、p13。

13. そして、藤沢や箱根のような比較的遺跡が残されている事例を除き、地域の規模や保全活動の取り組み状況から3つの宿場町を選定した。

1-3 先行研究

歴史的建造物による町並み保全に関しては、先行研究の蓄積がなされている。建築学、歴史学、地理学、観光学など幅広い学問領域からアプローチされてきた。地域固有の文化財を活用するまちづくりの手法は、1990年代半ばから確立している¹⁴。これらの活動では、文化財を活用して地域を観光地に変容させた事例が報告されている¹⁵。文化財保護がまちづくりに活用される背景としては、岡崎（2006）が、歴史的建造物や町並み、歴史的な風景の保全は、文化財保護の観点のみならず、地域商業活性化、コミュニティ活性化、アメニティ向上、都市アイデンティティの確立に貢献すると述べていることから分かる¹⁶。このように、文化財保護の役割は広がりつつあるとされる。

歴史的町並みの保存の理由について、林・江頭（1987）は住民らの保存意識の高さのみならず、建物や町並み等の要素が破壊されてこなかった点を指摘している¹⁷。この指摘は後に行われた文化庁の調査でも同様の傾向を示している¹⁸。わが国における歴史的な風景の保全が進むかどうかは、風景の価値を認識する以前に、歴史的建造物等のハードが残されているかどうかで決まってきたのである。しかしながら下村（2005）は都市の風景に対して、「科学技術や建設技術の進展そしてモビリティの増大に伴い、生活様式や都市を構成する素材が均質化してきた」と指摘している¹⁹。都市の歴史的な風景は近代化や都市化の影響を受け、消滅してきているのだ。

一方で、風景や景観に関する研究では、萩島（1996）の視点が参考になると考える。印象派や浮世絵に描かれている風景画とは、我々が親しんでいる風景であり、身近な生活景であると捉えている²⁰。しかしながら、これらの研究では建物や資源環境に注目しており、本研究が対象とす

¹³ 東京都から神奈川県の間設置された宿場町は10ある。そのうち、自治体の規模や宿場町における歴史的風景の保存の取り組みに関して実地調査やインターネット調査を行い、3つの宿場町に絞った。詳しくは、表1を参照してほしい。

¹⁴ 馬場憲一(2001)「日本における文化遺産の活用と地域づくり—1990年代の文化財政策との関わりのかか—」『法政大学現代福祉学部〈現代福祉研究〉創刊号』法政大学現代福祉学部, pp.35-47.

¹⁵ 例えば、沖縄県・竹富島や岐阜県・白川郷などが挙げられる。その他、大森・西山(2000)では福岡県吉井町(現、うきは市)の筑後吉井を事例に、歴史的町並みを観光資源としてまちづくりに活用する報告がなされている。大森洋子・西川徳明「歴史的町並みを観光資源とする地域におけるまちづくりに関する研究—筑後吉井の町並み保存事業を事例として—」『都市計画論文集』日本都市計画学会, 35巻, pp.811-816.

¹⁶ 岡崎篤行(2006)「これからの都市計画と歴史遺産の保存・再生」大川直躬編『歴史的遺産の保存・活用とまちづくり』学芸出版社, pp.67-112.

¹⁷ 林○廣・江頭邦道(1987)「歴史的町並み保存の展開と課題—自治体に対するアンケートをもとにして—」『法政研究』九州大学, 50巻, pp.267-284.

¹⁸ 文化庁文化財保護部(1998)『伝統的集落における歴史的環境整備を中心とした地域活性化方策の調査・検討:報告書』文化庁文化財保護部建造物課, pp.14-15.

¹⁹ 下村彰男(2006)「日本における風景認識の変遷—近代における—自然の風景の発見と価値づけ—」西村幸夫編『都市美—都市景観試策の源流とその展開』学芸出版社, pp.216-233.

²⁰ 萩島哲(1996)『風景画と都市景観—水・緑・まちなみ—』理工図書株式会社.

る無形資産まで言及はされていない。無形資産に基づく風景保全の取り組みについては、川口ら（2003）の研究があり、文学作品を活かしたまちづくりを対象にしていた。研究では、明日香の心象風景の保全活動における、万葉時代と現代の心象イメージの差を課題として挙げている²¹。景観のような物理的対象そのものや、その評価に関する研究が多いなかで、人々の心象が風景の保全にとって重要だとする考えは、筆者も賛同する。

本研究に近い存在は、馬場憲一の名が挙げられる。馬場（2013）は、市民の文化財の認識についてアンケート調査を行った。アンケートからは、多くの市民が国を頂点とするヒエラルキー構造に基づいて文化財を認識しており、身近な「地域遺産」を文化財として認識していないことが分かっている²²。そして、このような状況を踏まえ、自治体における文化財政策では、「地域遺産」の保護・継承の環境や仕組みの必要性を指摘している。さらに、馬場（2015）では、文化財保護法で保護対象とされていない「伝説地」の保護活動について研究を進めている。「伝説地」を「記憶の場」として保護し、文化財への登録を試みる馬場の研究は文化財保護の新たな動きとして注目に値する²³。

以上より、文化財保護の取り組みは、都市アイデンティティの確立、及びコミュニティの活性化に貢献することが明らかとなっている。しかし、文化財や文化財となり得る歴史的町並み保存活動が行われるかどうかについては、建物や町並みのような有形資産（ハード）ありきの取り組みである傾向が浮かび上がった。一方で、馬場は身近な地域遺産の保護について、自治体文化政策で守る必要性を語っている。筆者も同じ立場だ。さらには、法律では保護されない無形資産（ソフト）へ保護対象の拡大を訴えている。馬場の研究では、これらの資源の保護の必要性を訴えているが、具体的な保全手法については言及されていない。

²¹ 川口友子・糸長浩司・栗原伸浩・藤沢直樹（2003）「心象風景にもどづく明日香の『万葉の風景』づくりの課題」『農村計画論文集』農村計画学会，22巻，pp.49-54.

²² 馬場（2013）は論文内において、「地域遺産」を市民がはぐくみ形成してきた多様な文化的価値を有し、地域に伝承されているものと説明している。馬場憲一（2013）「地域主権実現のための自治体文化財政策について：新たな『文化財』概念の構築を踏まえて」『現代福祉研究』法政大学現代福祉学部，第13号，pp.1-22.

²³ 馬場憲一（2015）『「記憶の場」の形成と『歴史的環境』との関わりについて—勝淵神社の柴田勝家兜埋納伝説を事例として—』『現代福祉研究』法政大学現代福祉学部，第15号，pp.153-170.

第2章 風景文化の破壊と保全

2-1 歴史的風景の破壊

わが国の歴史的な風景は一斉に消失したわけではなく、社会の変化に呼応する形で消滅の危機に曝された。本節では、わが国の歴史的な風景がどのように破壊されてきたのか、時系列に詳述する。木原（1982）は、明治維新から1980年頃の歴史を振り返り、歴史的環境が破壊の危機に曝された時期は4度あったと述べた²⁴。

一度目の危機は、明治維新の直後である。1868年（明治元）、維新政府により神仏分離令に出されたことで、旧物破壊や伝統文化軽視の風潮が社会に蔓延していた²⁵。廃仏毀釈の流れは結果として、各地で仁王門や五重塔等、日本古来の建造物が破壊に繋がった。

二度目の危機は、大正から昭和初期の時期だ。西洋諸国から先進的な工業技術を輸入し、国内の整備が進められたことを背景に、道路の新設、鉄道網の形成、工場設置等の人為的な要因により、史蹟や天然記念物が破壊される状況あった²⁶。加えて、昭和初期の経済不況や政情不安の社会の中で、旧大名所有の宝物が散逸や、城郭建築などの修理が必要となった。さらには、国外への美術品の流出が相次ぎ、建造物も分解して輸出される危険性があった。なぜなら、当時の制度では古社寺以外の建造物に対して、保存の措置が図られていなかったためである。

三度目の危機は、1941年（昭和16）に太平洋戦争とその余波の中で生じた。戦時下の空襲は都市に甚大な被害を与えた。1942年（昭和17）に米軍が東京へ初めて空襲を行った。空襲は終戦まで続き、特に1944年（昭和19）以降は無差別爆撃が行われ、国内の大規模な範囲に渡り被害が生じた。結果として、主要な都市は空襲を受け、歴史的環境が焼失した。ただし、奈良、京都、鎌倉の古都は、米軍の空襲の目標から外されたことから、空襲の戦火は免れていた。名古屋城や和歌山城、広島城や首里城等、当時の国宝に指定されていた歴史的建造物も損傷している²⁷。また、同時に伝統的な町並みや江戸時代、明治・大正時代の建築物も失われた。要因の1つとして考えられるのが、疎開による影響である。疎開で都市から離れる際に、家業を廃業したり、移転するために家屋を壊したりしていたためだ。

終戦後の、社会の劇的な変化は経済的困窮をもたらした。官民双方の財政は逼迫し、戦災復興が急務とされていたことから、歴史的な風景の保全へ関心を向ける余裕はなかった。1949年には世界最古の木造建造物である法隆寺金堂の壁画が焼失し、その後2年以内に4件の国宝建造物が焼損・焼失してしまった²⁸。

四度目の危機は、1960年代以降の高度経済成長によってもたらされた。1964年の東京オリン

²⁴ 木原啓吉（1982）『歴史的環境—保存と再生—』水曜社，pp.2 - 24.

²⁵ 木原啓吉（1982）『歴史的環境—保存と再生—』水曜社，pp.3-8.

²⁶ 国土交通省都市・地域整備局 公園緑地・景観課 景観・歴史文化環境整備室監修，歴史まちづくり法研究会（2009）『歴史まちづくり法ハンドブック』ぎょうせい，p6.

²⁷ ただし、奈良、京都、鎌倉の古都は、米軍の空襲の目標から外されたことから、空襲の戦火は免れた。木原啓吉（1982）『歴史的環境—保存と再生—』水曜社，p14.

²⁸ 日本建築学会（2004）『まちづくり教科書第2巻 町並み保全型まちづくり』丸善，p13.

ピック開催に向け、首都高速道路の建設や東海道新幹線の開通が行われた。このような全国規模で展開した急速な開発や都市化は、歴史的な風景のみならず自然環境も破壊した。この時期の破壊は、先に述べた三度の危機に比べると規模が巨大であった点に特徴がある。単独の歴史的建造物の破壊というよりは、周辺を含めた広域的な風景の破壊が進んだからだ²⁹。さらに、生活の現代化も、近現代建築の破壊、町並み・集落等から成る歴史的な風景の破壊を後押しした³⁰。京都や奈良、鎌倉といった古都では環境破壊が起き、歴史的な風景を守るために市民らによる保存活動が展開していった。古都以外の地域でも歴史的な風景を有するところでは同様に、歴史的な風景の保全を目的とした市民活動が全国各地で起きた。

以降も、歴史的な風景の破壊は続いた。特に 1980 年代後半から 1990 年代前半のバブル経済期前後では、再び危機的状況に直面した。土地価格の異常な高騰を背景に、開発業者らによる土地の買収が行われ、古い家屋が破壊が相次いだ。跡地はマンションやビル、もしくは更地へと変わり、連続した町並みによる風景を分断した。また、土地を手放さなくとも、好景気の結果、家屋の改修や建て替えを行った人々も多かった³¹。一方、このバブル経済期には中央省庁の補助金制度を利用し、開発と結びついた風景保全も進められた³²。

1995 年 1 月に発生した阪神・淡路大震災は、木造建造物や近代建築物が災害に弱いことがメディアを通じて広く周知されてしまった。人々の建造物に対する防災の意識が高まりを背景に、耐震性の不十分な建物や、老朽化した近代建造物の建て替えが進んだ³³。

以上のように、我が国の歴史的な風景は段階的に破壊の危機に直面してきた。歴史的な風景の破壊は、災害、社会体制や生活環境の変化の影響を色濃く受けている。

2-2 風景保全の法整備

歴史的な風景の破壊に対して、保全手段が全く講じられなかったわけではない。1871 年（明治 4）の「古器旧物保存方」が布告されて以降、幾多の法律や制度で歴史的建造物を守ってきた。1950 年の「文化財保護法」は、同法以前の制度を踏まえた統一法として成立し、わが国の歴史的な風景保全を支えている。また、近年では「景観法」（2004 年）や「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（通称、歴史まちづくり法）」（2008 年）が制定され、歴史的な風景の保全措置は拡大している。本節では、上記 3 つの法律を概観し、制定に至るまでの背景や保全対象について述べる。

（1）文化財保護法

²⁹ 木原啓吉（1982）『歴史的環境—保存と再生—』水曜社、p26.

³⁰ 日本建築学会（2004）『まちづくり教科書第 2 巻 町並み保全型まちづくり』丸善、p17.

³¹ 片桐新自（2000）「第 1 章 歴史的環境へのアプローチ」片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社、pp.13-14.

³² 例えば、「歴史的建築物等活用型再開発事業」（建設省）や「ふるさと創生一億円事業」（自治省）が挙げられる。

³³ 片桐新自（2000）「第 1 章 歴史的環境へのアプローチ」片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社、pp.16-17.

文化財保護法は、わが国の文化財保護の拠り所となる法律として 1950 年に制定された。制定の背景には、戦後の混乱の中で貴重な歴史的建造物の散逸、荒廃の危機感が高まっていたことが挙げられる。1949 年に起きた法隆寺金堂の壁画焼失を契機に、時代に即した法律の必要性が高まっていた。

同法の中で文化財の対象については、明確にされている。文化財とは、わが国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高い有形及び無形のもの、そして国民の生活の理解に欠くことの出来ない風土や景観³⁴とし、さらに「わが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、且つ、将来の文化の向上発展の基礎をなすもの」³⁵、「貴重な国民的財産」³⁶という表現を用いて示している。わが国の歴史・文化を正しく理解するために不可欠な国民共通の財産が、すなわちわが国における文化財ということであり、同法では文化財を劣化や破壊から防ぎ、活用を行うことを目的としている。

同法においては、全ての文化財が一律に保護されるのではない。特に価値のある重要な文化財を選択・特定し、法令によって具体的な保護を加える。いわゆる「優品主義」に基づく保護が行われている。馬場（2013）は、「日本における文化財行政は国を頂点とするヒエラルキーの中で取り組まれて」おり、市民は個人に関わる場所・モノ・行為を『文化財』と捉えにくい点を指摘し、これらを保護する仕組みの必要性を訴えている³⁷。

（2）景観法

2004 年に制定された景観法は、わが国初めての景観に関わる法律で、景観規制に対する根拠法となっている。1960 年以降、地方自治体では景観条例が制定された。ところが、根拠法を持たないままの自主条例であったため、有効な規制力を持たないことが最大の問題であった。景観に配慮する意識が高まりを受け、2003 年に国土交通省が発表した「美しい国づくり政策大綱」で、景観に関する法整備を行うことが明記され、景観法が制定される運びとなったのである。

同法の基本理念では、良好な景観とは、「国民共通の資産」として「地域の自然、歴史、文化等と人々の生活、経済活動等との調和により、形成されるもの」と規定している³⁸。地域の実情に即した多様な景観を保全対象として認め、景観計画の策定、景観計画区域や景観地区等における規制、景観重要公共施設の整備等の施策を総合的に講じて保護を行うことを定めている³⁹。

地域の実情にあった保全手段を講じることが可能となった点は、景観法の意義と言えよう⁴⁰。ところが、中井・小浦（2005）は、法律の内容は、徹頭徹尾、建物を中心とした物的空間として

³⁴ 文化財保護法第 2 条

³⁵ 文化財保護法第 3 条

³⁶ 文化財保護法第 4 条

³⁷ 馬場憲一（2013）「地域主権実現のための自治体文化財政策について—新たな『文化財』概念の構築を踏まえて—」『現代福祉研究』法政大学現代福祉学部，第 13 号，pp.1-22.

³⁸ 景観法第 2 条

³⁹ 景観法第 1 条

⁴⁰ 例えば、規制のメニューに地方公共団体の意思を反映し、国から提示されている規制の他に、地域が自主的に定めたローカル・ルールを加えることができる。

の景観、すなわちハードを操作しようとするものである点を課題に挙げている⁴¹。建造物にしか保全措置や修景支援が及ばず、結果としては、建築物があってこそその保全となっている。

(3) 地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法）

歴史的建造物や町並みが形成されている地域において、伝統工芸品の製造や販売、祭礼行事などの地域に根差したなりわい（歴史的風致）が失われている現状があった。背景には、維持管理に多額の費用がかかること、人口減少や少子高齢化に伴う担い手不足という問題が挙げられる。そこで、2008年に「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」（以下、歴史まちづくり法）が制定された⁴²。

同法は、歴史的風致を維持・向上させ、後世に継承する目的を掲げ、文化庁、農林水産省、国土交通省が関係している。同法で定義されている歴史的風致とは、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史的価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」のことである⁴³。

歴史まちづくり法の画期的な側面は、単に歴史的価値の高い建造物や史跡が残されているだけでは歴史的風致と言えず、地域の歴史や伝統が活かされた人々の営みを保全対象として含めている。加えて、歴史的風致を向上することを目的としているため、歴史的建造物の復原や修理等への支援が受けることが可能だ。ハードとソフトの両面から歴史的環境の保全が進められることとなった。

しかしながら、歴史まちづくり法の直接の事業対象となるのは、重要文化財等や重要伝統的建造物群保存地区の周辺地域のみとなっている。修景の支援も、国宝や重要文化財にのみ適用されるのが現実である。認定へのハードルの高さが課題だ。

わが国の歴史的風景の保全体制は、依然として、優品主義やハード（建物や施設等）重視の印象を受ける。これらの保護制度の下では、伝承、記憶、心象風景や食文化のようなものは保全・再現が容易ではないことが分かる。

2-3 都市のイメージ形成とケヴィン・リンチの思想

本研究では、ケヴィン・リンチの著作である『都市のイメージ』にて⁴⁴、リンチが述べている環境イメージを構成する成分「アイデンティティ (identity)」、「構造 (structure)」、「意味 (meaning)」の3つの視点で分析を試みる⁴⁵。ケヴィン・リンチは、1918年（大正7）にアメリカ合衆国のシカゴに生まれた都市計画家・建築家である。1960年に出版された『都市のイメージ（原題：The Image of the City）』では、ボストン、ジャージー・シティ、ロサンゼ

⁴¹ 中井検裕・小浦久子（2005）「景観法成立を受けて自治体が工夫すべきこと」社団法人日本建築学会編『景観法と景観まちづくり』学芸出版，pp.16-23.

⁴² 同法の制定には、文化庁、農林水産省、国土交通省が関係している。

⁴³ 地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律第1条

⁴⁴ 同書は、1968年に日本語翻訳版が出版された。2007年には新装版が出版されている。本論分では、2007年の新装版を用いているが、1968年に出版された書籍も適宜参考とした。

⁴⁵ リンチ・K 著，丹下健三・富田玲子訳（2007）『都市のイメージ 新装版』岩波書店，pp.10-11.

ルスの3つの都市を対象に、パブリック・イメージが都市のイメージ形成に結びついていることを明らかにした⁴⁶。リンチはそれまで建物の外観や都市景観などの物理的アプローチが中心となっていた都市デザインの分野において、地域住民らの記憶や経験といった心理的アプローチから研究を行った。後の都市デザイン分野に影響を与えた人物である。なお、同書はわが国でも丹下健三と富田玲子による翻訳版が1968年に出版され⁴⁷、その後2007年に新装版も出ている。

リンチ(2007)によると、環境のイメージを構成する成分は、①アイデンティティ(identity)、②構造(structure)、③意味(meaning)の3つとなっていた⁴⁸。アイデンティティとは、「その対象物を他のものから分けていること」⁴⁹、「個性とか単一性の意味」と説明されている⁵⁰。構造は、空間的關係を示している。そして、意味は社会的、歴史的、機能的、個人的要因などから成り立つものことである⁵¹。3つの成分を掲げているが、彼自身の研究では物理的な形態を有している2つの成分に注目しており、意味については検証がされていない。理由としては、「都市における意味の問題は複雑なもの」とされ、「都市についての個人的な意味は、その形態がわかりやすい場合でさえ非常にばらばらなので、少なくとも分析の初期の段階では、意味を形態から切り離してもよいだろう」と考えているからである⁵²。なお、リンチの提示する「意味」に関しては、後にAppleyard(1969)がイメージアビリティの強さと建物や場所の形状、目につきやすさなどとの関係について言及した⁵³。さらには、Harrison and Howard(1972)が、意味の内容を①location、②appearance、③meaning、④associationの4つに分類し、意味の解明が進んだ⁵⁴。このような研究の蓄積が挙げられる。

リンチ曰く、アイデンティティの鮮明さと構造の明確さとは、「強力なシンボルを育てるための、第一歩」と表現し、これらの成分の重要性のことだと述べている⁵⁵。一方で、彼はパブリック・イメージに影響を及ぼすものについて、「たとえばある地域がもつ社会的な意味、その機能、その歴史、またときにはその名称までが影響している」とも述べている⁵⁶。また、シビックプライドの研究をしている武田(2015)は、物理的形態に個人的な意味を結びつけることが大切である姿勢を示し、意味の獲得を通じて地域に対する共感を高め、社会参画など主体性の

⁴⁶ リンチ・K著、丹下健三・富田玲子訳(2007)『都市のイメージ 新装版』岩波書店、p55.

⁴⁷ リンチ・K著、丹下健三・富田玲子訳(1968)『都市のイメージ』岩波書店.

⁴⁸ リンチ・K著、丹下健三・富田玲子訳(2007)『都市のイメージ 新装版』岩波書店、pp.10-11.

⁴⁹ リンチ・K著、丹下健三・富田玲子訳(2007)『都市のイメージ 新装版』岩波書店、p10.

⁵⁰ リンチ・K著、丹下健三・富田玲子訳(2007)『都市のイメージ 新装版』岩波書店、p10.

⁵¹ リンチ自身は意味について、空間的關係とは異なる関係、と言及しているのみである。

⁵² リンチ・K著、丹下健三・富田玲子訳(2007)『都市のイメージ 新装版』岩波書店、pp.10-11.

⁵³ Appleyard, D(1969)“Why buildings are known”, *Environment and Behavior*, Vol.4, pp.389-411.

⁵⁴ Harrison, D.J and Howard, A.W(1972)“The role of Meaning in the Urban Image”, *Environment and Behavior*, Vol.1, pp.131-156.

⁵⁵ リンチ・K著、丹下健三・富田玲子訳(2007)『都市のイメージ 新装版』岩波書店、pp.151-152..

⁵⁶ リンチ・K著、丹下健三・富田玲子訳(2007)『都市のイメージ 新装版』岩波書店、p55.

醸成が可能となると指摘している⁵⁷。

このため、リンチ自身は、物理的な形態を有している 2 つの成分で分析をしていたが、筆者は意味も含めることとする。意味 (meaning) という成分は、特に風景が失われてしまった、視覚的に明瞭でない都市のイメージ形成に対して、有効に働いていると考える。3 つの分析を進めることで、建物主体で構成される風景が残されていない都市において、地域らしさをどのように認識し、残そうとしているのかという点を明らかにできると考えたため、援用する。

さらに本研究では、リンチの分析方法を事例に照らす際、アイデンティティを「地域が宿場町であった価値を認識すること」、構造を「宿場町の空間」と考えた。さらには、リンチが社会的、歴史的、個人的な要因とした意味を、「宿場町にまつわるエピソード」と捉え直した。

前述までの法制度では、リンチで定めている「構造」の保護は可能となっている。また、構造が残されている地域においては、構造に付帯している意味の保護までは言及されていない。法制度の限界が浮き彫りになった。しかし、リンチが言う「意味」もアイデンティティや構造の形成に結びついているはずだと考える。

⁵⁷ 武田重昭 (2015) 「都市風景の中のシビックプライド」伊藤香織・紫牟田伸子監修, シビックプライド研究会編著『シビックプライド 2 国内編』—都市と市民のかかわりをデザインする』株式会社宣伝会議, pp.180-183.

第3章 品川宿における風景文化の再現

本章では、品川宿で行われた風景文化を再現する取り組みに注目する。まず、品川宿の歴史と遺跡について紹介し、風景文化を保全する活動の歴史の変遷について述べていく。品川宿で実施された活動のうち、「拠点施設の設置」「まつり文化の創出」「修景の取り組み」「食文化の復活」の実態について詳述する。

品川宿は東京都品川区に存在している。東は東京湾に面する臨海部、西は神奈川県川崎市に囲まれている。区の人口は38万7266人（2017年12月1日現在）である⁵⁸。区内は5つの地区に分けることができ、品川宿が置かれている地域は品川地区に該当する。品川地区は、旧荏原郡と旧品川郡が合併してできた地区である。

3-1 品川宿の歴史と遺跡⁵⁹

(1) 品川宿の歴史

品川宿は1601年（慶長6）に、江戸・日本橋から京都へ向かう東海道の1番目の宿場として設置された。場所は、現在の京急本線の北品川駅から青物横丁駅周辺まで3.8キロメートルに及ぶ。品川宿は江戸に一番近い宿場町であるため、1635年（寛永12）に義務付けられた大名の参勤交代に使用されて以降、通行量が多く、活気のある地域となっていた。加えて、江戸の郊外に立地しているというアクセスの良さから、宿場内で営業していた遊興で遊ぶことを目的に来る客も多かった。1800年（寛政12）の記録に基づく、品川宿には、本陣が1軒、脇本陣が2軒、旅籠が93軒、茶屋・蕎麦屋などが1561軒も存在していた⁶⁰。

品川宿にまつわる史実の1つに次のようなものがある。1862年（文久2）12月13日、長州藩士の高杉晋作や久坂玄端らによって、品川の御殿山に建設中のイギリス公使館が焼き討ちにあった。高杉らはイギリス公使館の襲撃する計画を立てるため、品川宿で有名な旅籠「土蔵相模」に集まっていたのである⁶¹。この歴史的史実は、幕末の品川宿が歴史の舞台となったことを示している。

明治時代に入ると品川は工業地帯として発展する⁶²。大正から昭和初年に目黒川が改修された

⁵⁸ 品川区 HP 「品川区の統計」

<http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/hp/menu000015000/hpg000014918.htm> （最終閲覧日 2017年12月26日）

⁵⁹ 「遺跡」とは「過去に建築物や戦争などのあった場所。旧跡」といい、「遺構」は「昔の建築物（の一部）が地面や地中に残った跡」とされている。西尾実、岩淵悦太郎、水谷静夫編（2015）『岩波国語辞典』岩波書店、による。本研究では、街道の道幅や坂道、微高地なども対象としており、広義の「遺跡」を使うことにする。

⁶⁰ 建設省関東地方建設局監修、ニッセイエプロ株式会社編集（1992）『東海道見聞録』建設省関東地方局、pp.32-33.

⁶¹ 土蔵相模とは通称で、旅籠の名称は「相模屋」である。外壁が土蔵のようななまこ壁であったことに由来している。

⁶² 1873年（明治6）、品川宿東海寺裏の目黒川べりにガラス製造の興業社が創立されて以降、工場が集積するようになった。

際に埋め立てが行われ、工場用地となったからだ⁶³。この時期の品川宿はまだ宿場町の面影があり、江戸時代から続く商家や貸座敷が残っていた。戦後に入ると、品川の工場は地方に移転していく。工場跡地には、天王洲アイルや品川シーサイドフォレストなどのオフィス・商業・住宅を複合したビルの建設が進んだ。

宿場町の風情を伝える歴史的な建物の消失が急速に進んだのは、バブル期前後のことだ。地価高騰による建物の取り壊しや改修、高齢化や跡継ぎ問題に伴う商店の減少が起きた。バブル期に宿場町の面影を伝える建造物が急速に失われた。

2019年度には京急や東京都などの事業者は、京急本線北品川駅が高架化に着手、高架化工事に伴い、周辺を再開発して駅前に交通広場を設ける計画である⁶⁴。この計画に基づき駅前に大きな交通広場を作ってしまうと、旧東海道の町並みが分断されてしまう危険性がある。品川宿は再開発の影響に再び脅かされている。

(2) 品川宿の遺跡

品川宿には江戸時代の歴史的建物が存在しない。高度経済成長期、バブル期に行われた都市開発の影響でなくなった。しかし、品川宿内を通る東海道の幅員や起伏は、江戸時代のまま維持されている。道幅は平均三間半（6.3メートル）で、二間半（4.5メートル）から四間式尺（7.8メートル）であったとされ⁶⁵、現在も残っている。品川宿を貫く東海道は、江戸湾（東京湾）の近くを通っていた。このため、東海道から海側につながる路地は、高低差のある坂道となっている。このため現在でも坂の下から東海道を見上げると、なだらかな斜面が続いている。現在、品川宿で「街道文庫」という古本屋を営む田中義巳は、東海道に関する勉強会や街道歩きを企画する、まちづくりの中心人物の1人である。田中は「品川には歴史的なものが何もないという人もいるが、街道の道幅は当時のまま残されており、宝物だ。さらに坂になっている点は東海道が海に面していた名残であり、貴重だ」と筆者の聞き取り調査に対し語っていた⁶⁶。

明治時代に入って宿駅制度が廃止された後も、品川宿には依然として宿場町の風情を残す茶屋や貸座敷等の建築物が存在していた。ところが、1956年の売春防止法の制定を受け、品川宿では一斉に貸座敷が廃業し、品川宿の歴史を感じさせる風景は次第に薄れた。貸座敷であった建物は壊され、跡地はマンションやアパートに変わった。先述した「土蔵相模」も、1982年までは残されていたが、壊され、跡地はコンビニエンスストアに変わった。

品川宿に残された指定文化財には、品川宿本陣跡、品川浦船だまり、鈴ヶ森刑場跡がある。品川宿本陣跡の場所は1978年に区の文化財（史跡）に指定され、現在は「聖蹟公園」となっている⁶⁷。品川宿の歴史を伝えるものは、公園内の解説板のみだ。

⁶³ 品川区（2014）『品川区史 2014 歴史と未来をつなぐまちしながわ』品川区，pp.272-273.

⁶⁴ 品川駅南地域の未来を創る推進協議会 HP「概要」<http://shinagawa-mirai.org/outline/>（最終閲覧日 2017年12月25日）

⁶⁵ 品川区教育委員会（1998）『品川の古道』品川区，p26.

⁶⁶ 筆者による、古本屋「街道文庫」のオーナー・田中義巳への聞き取り調査（2017年11月27日実施）

⁶⁷ 公園の名称は、明治天皇の行幸先であったことに由来する。

3-2 品川区による取り組み

品川区は1994年に「旧東海道品川宿周辺整備基本計画報告書」を作成した。同報告書の基礎となった資料は、1988年に発足した「旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会」が区より委託されてまとめた「旧東海道品川宿周辺整備・基本構想」だった。その後、区と同協議会が協働して1995年に「東海道品川宿周辺まちづくり計画書」を策定。同計画書には風景を再現する方向性がうたわれた。以降の活動は、同計画書に基づいて行われてた。

具体的には、街道沿いの松の植栽整備、拠点施設・お休み処の設置、石畳や電柱の地中化工事などの修景である⁶⁸。同計画書を踏まえて、2006年には具体的な事業を明記した「東海道周辺まちなみ整備事業計画書」を作成し、店舗ファサード整備等の修景事業、後述する品川宿交流館の整備などを進めていった。区は「歴史を活かしたまちづくり」とうたっており、今後も促進していく姿勢を示す。2010年に制定された区景観条例の中で、区は品川宿の地域を「重点地域」に位置付けた。

なぜ品川宿を活かしたまちづくりが始まったのだろうか。活動のきっかけは、1988年にさかのぼる。同年の秋、滋賀県土山宿を有する土山町で開かれた第1回東海道五十三次シンポジウムに、区職員3人と同協議会に所属する商店街幹部、町内会幹部らが参加したことであった。当時の土山町長に招待されたのだ。そこで、次回のシンポジウム先が品川宿に決まった。

土山宿のシンポジウムから戻ってくると、第2回のシンポジウム開催に向けて準備が始められた。その中で、同年の年末には、「旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会（以下、まち協）」が設立された。地元8商店街⁶⁹、町会、地域住民らが参加した。

まち協設立当時のことを、元品川区職員の新美まりは次のように語り、苦笑した。「品川ってどんなまち？」と他自治体の方に問われた時、正直言って、何のイメージもなかったの⁷⁰。なぜなら、当時の品川区職員や地元地域の人々にとって、宿場町の歴史を伝える風景は日常生活に埋もれていた風景であったからだ。特に、品川宿周辺で高層ビルや商業施設の建設等の開発が急速に進められた状況に比べると、品川宿の地域は昔ながらの商店が残されていた状況であった。江戸時代の1800年（寛政12）から品川宿で老舗商店を営む堀江新三は、当時の風景について、「自分の親が経営していた店は時代に追い付いていない店舗だった。みんな知り合いだから、道を歩くだけで声を掛けられ、家に着くまでに親まで知れ渡ってしまうくらい。しかし、しがらみが強くて狭いと窮屈に感じていた。古臭い町だと思っていた」と振り返る⁷¹。

同協議会設立には、シンポジウム参加者も含まれていた。彼らは、「東海道宿場町」という地

⁶⁸ 旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会（1995）『品川宿周辺まちづくり計画書』品川区を参照した。

⁶⁹ 現在、商店街の数は6に減った。

⁷⁰ 新美は元品川区職員で、品川宿の歴史を活かしたまちづくり活動を初期から知っている。筆者による、元品川区職員・新美まりへの聞き取り調査（2017年12月6日実施）

⁷¹ 堀江は現在、旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会の会長を務めている。また、1800年（寛政12）から続く、フードマーケット平野屋のオーナーでもある。筆者による、旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会会長・堀江新三への聞き取り調査（2017年12月6日実施）

域資源の貴重さを実感し、品川宿に戻ってきた。東海道の宿場の歴史的価値に気付いたのだった。おのずから、地域の歴史文化を学び、まちづくりに活かしていこうとする機運が高まっていた。

ところが、同協議会の設立当時、活動はそれほど円滑に進められていなかった。なぜなら、同協議会に加わった人たちは、まちづくりの初心者だったので、イベントを開催する以外に、何を行うべきかわからなかったのである⁷²。加えて、運営委員会が開かれても、話し合いはまとまらなかった。まちづくりの素人であったことに加えて、北品川と南品川という 2 つの地域が対立しやすかったのも原因だ。混沌としていた会議を見守っていた区は、「旧東海道品川宿周辺整備・基本構想」の作成作業を、同協議会に委託した。

区は同報告書の作成を手助けするために、まちづくりコーディネーターとなる人物を同協議会の会合に参加させた。招かれたのは佐山吉孝で、当時は品川区が発行していたグラフ誌の編集長を務めていた。佐山が初めて同協議会の会合に参加した時、「地元住民らが未だに地域の魅力に気づいていないことに驚きの感情を抱いた」と感じたという⁷³。そして、「地元の宝探しをするワークショップを企画した際、道に歴史が残されていると気づいた。本陣、旅籠、古民家などの歴史的な建物が多数残っている他の宿場などを見学に出向いたが、品川とはあまりにも事情が異なっていた。歴史的建物に頼る方法は品川では通用しないと感じた」と振り返っている⁷⁴。

3-3 品川宿交流館の開設

本章 1 節、2 節のような経緯を経て、宿場を活かしたまちづくりは少しずつ前進していった。1 つの節目は、品川区が 2009 年 1 月に開設した 4 階建て「品川宿交流館 本宿お休み処」（以下、品川宿交流館）である。廃業した婦人服衣料店の所有者が、品川区に対して「店舗を買い取ってくれないか」と相談を寄せた。そして、区が同店舗・土地を品川区が 8700 万円で買い上げた⁷⁵。建物の外観に黒塗り格子壁や木看板を取り付け、旧東海道宿場町の風情がでるような外観へ改修も行った。

立地場所は旧東海道商店街（旧東海道）に面しており、京浜急行線「北馬場駅」から徒歩 5 分ほど歩く。10 時から 17 時まで開いており、月曜日が休館となっている。

同交流館はまち協が区から委託を受けて運営している。4 階建てのうち、1 階は休憩所、観光案内所、貸しギャラリーを兼ねたスペースである。観光パンフレットやチラシが置かれていたり、まち歩きマップが販売されていたりする。入館料は無料なので、品川宿周辺で働くサラリーマン、買い物客、観光客らが気軽に出入りする。旧東海道に面した入り口付近には、駄菓子屋「またあした」も併設され、子どもたちで賑わう。下町らしい風情を感じることのできる空間だ。

⁷² 筆者による、元品川区職員・新美まりへの聞き取り調査（2017 年 12 月 6 日実施）

⁷³ 筆者による、旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会・佐山吉孝への聞き取り調査（2017 年 12 月 3 日実施）

⁷⁴ 筆者による、旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会・佐山吉孝への聞き取り調査（2017 年 12 月 3 日実施）

⁷⁵ 筆者による、元品川区職員・新美まりへの聞き取り調査（2017 年 12 月 6 日実施）

2階には品川宿展示室がある。床や壁にガラスケースを設置し、品川宿の歴史文化を紹介していた。年に4回程度、特別企画展を実施するという。筆者が訪ねた時、品川宿で実施されている商店ファサードの修景工事に関する資料を展示していた。3階は貸事務所で、北品川で子育て支援をしている「おばちゃんち」の事務所、4階はレンタル会議室である⁷⁶。

毎月の最終火曜日には、交流館1階で、同協議会の運営委員会も開かれている。同協議会は会場費を支払わなくても使える利点がある。「どなたでもウェルカム、どんな提案もオーケー、全てオープン！」と門戸開放をうたっている。

交流館が設置されてから、町内会や同協議会の運営委員会会合が開きやすくなった。会場費が不要なうえ、夜遅くまで使えるからである。さらに駄菓子屋を開業したので、地域の子供たちが駄菓子を買って求めてやって来るようになった。ある意味では、コミュニティの場である。

宿場に関する文化事業や経済活動に関する問い合わせも同交流館に寄せられるようになり、情報を集約する機能も持ちつつある。

3-4 まつり文化の創出

品川宿で行われている「しながわ宿場まつり」は、住民らが新たに作りあげた行事だ。1990年から始まり、2017年で27回目に達する。例年8万人前後の来場者があり、今では地域最大の祭礼に成長した。主催は地元の4商店街組合の連合組織で、北品川本通り商店会、北品川商店街協同組合、新馬場商店街振興組合、青物横丁商店街振興組合で構成する。いずれも東海道沿いに店を構えている。毎年9月の最終土日に2日間開催し、おいらん道中、品川寺火渡り荒行、江戸時代風俗行列などを実施していた⁷⁷。

「しながわ宿場まつり」の開催には逸話がある。同まつりは、先述したシンポジウムを品川宿で開催することに併せて企画されていた。1989年に第1回の宿場まつりが計画されたのだが、台風接近のため、中止となった。地元商店街や町会等から寄付金、協賛金をもらっていたのだが、開催されず、幻のまつりとなった。関係者は「失敗のまま終わる訳にはいかない」と考え、翌1990年、第2回の同まつりを実現させた。狙いは2つあった。1つには地域に賑わいを取り戻すこと。2つにはまつり文化を若い世代に継承することであった。

歴史的な文化資源が変容した事例もある。同まつりの催し物である「おいらん道中」がその1つだ。筆者は2017年9月23日の土曜日、16時30分から19時まで実施された第27回同まつりを見学した。カラフルな着物を着たおいらんの女性5人が八ツ山口付近から品川橋までを練り歩き、人々はカメラを向けて熱心に撮影していた。禿（かむろ）に扮した女兒の保護者らが笑顔で見守っていた。

しかし、品川宿には遊郭であった歴史はあるものの、花魁はいなかった。そもそも、品川宿は江戸の遊郭「吉原」ではない。花魁がいたのは江戸の吉原、京の島原だけであったのだ。では、

⁷⁶ 同協議会の収入は、区からの委託費だけでなく、3階の事務所を貸すことで賃貸料を得ている。

⁷⁷ 「第27回しながわ宿場まつり」のチラシを参照した。

なぜ品川宿で「おいらん道中」を行うことになったのか。関係者によると⁷⁸、同まつりが始まった当時、遊女であった家系の家族に対する微妙な感情は残っていたという。しかし遊女ではなく、花魁であれば、「角が立たない」という事情があったのだそうだ。このように歴史は変容して再構成されていたことが分かった。

いずれにしろ、同まつりの開催は、区民らに共通意識を植え付け、商店街のにぎわいづくりやコミュニティの再構築に貢献していたことは間違いない。

3-5 修景の試み

品川宿では、東海道を代表する風景の修景が行われている。それは、松の植栽だ。1990年代初め、区や同協議会のなかで、自然な感情として、「シンボルである松を植えて往時の風景を再現したい」という構想が持ち上がった。両者が話し合った結果、東海道沿いに品川公園を整備する際、公園入り口に松を植えることを決めた⁷⁹。どのような松を、どこから移植するか、との検討を始めた際、同協議会会長の堀江新三は「葛飾北斎の浮世絵に描かれている松をイメージしたとき、まっすぐな新しい松より、曲がっている古い松がいい。その方がいかにも東海道らしい」と考えたことを証言する⁸⁰。曲がっている松がふさわしいのは、厳しい天候から旅人らを守ってきた東海道の松らしいからである。結果として、東海道にある松を移植することに決まった。

かつて、東海道の街道筋には、松が植えられていた。江戸幕府は、幕府を開いた翌年の1604年（慶長9）、東海道をはじめとする諸国の街道の両側に松や杉を植えるように命じた。並木は日差し、風、雪から旅人や道を守るだけでなく、往來の道しるべという役割も担っていた⁸¹。並木として植えられる植物は、土地の自然に適した樹木が選ばれていた。海沿いに立地していた品川宿周辺には、強い海から塩風を遮る松並木が植えられた。塩に強く、塩の多い土壌でも生育したのだった⁸²。

品川宿で実際に松を植えたのは、1993年のことである。この時に植樹された松は、浜松市および同市民から品川区に寄贈されたものだ。先述したシンポジウムを契機に「東海道宿場町ネットワーク」が設立し⁸³、品川区と浜松市に交流が生まれていたため⁸⁴、松を譲り受けることができたのである。浜松の松は、品川公園内に設置した「松の広場」に植樹された。

⁷⁸ 筆者による、古本屋「街道文庫」のオーナー・田中義巳への聞き取り調査（2017年11月27日実施）

⁷⁹ 筆者による、旧東海道品川宿まちづくり協議会会長・堀江新三への聞き取り（2017年12月3日実施）

⁸⁰ 筆者による、旧東海道品川宿まちづくり協議会会長・堀江新三への聞き取り（2017年12月3日実施）

⁸¹ 筆者による古本屋「街道文庫」のオーナー田中義巳への聞き取り調査（2017年11月27日実施）

⁸² 安藤（歌川）広重『東海道 鈴ヶ森 日本橋』の浮世絵には、海沿いに松並木が広がっていることが確認できる。

⁸³ 東海道シンポジウムとは、特定非営利活動法人「歴史の道東海道宿駅会議」が年に1度開催する大会のことである。東海道沿いの宿場町が参加し、東海道や宿場町の歴史文化を学んだり、宿場町間の交流を深めたりしている。

⁸⁴ 例えば、愛知県の御油宿から寄贈される場合、天然記念物の松並木の木をそのまま移植するのではなく、松の種子を6年かけて育て、高さ2メートルほどの若木が提供されている。

同 1993 年、今度は静岡県三島市からも松を寄贈する話が出て、別の場所に植樹された。こうした松の植樹は以降も続けられ、2017 年 12 月までには、浜松と三島（静岡県）のほかにも松の寄贈が相次いで実現した。受け取った順番で紹介すると、土山（滋賀県）、保土ケ谷（横浜市）、袋井（静岡県）、大磯（神奈川県）、御油（静岡県）、枚方（大阪府）、坂之下（静岡県）、関（三重県）、亀山（同）、藤沢（神奈川）の計 12 か所から譲り受けている。東海道シンポジウムに参加した宿場町に寄付を呼び掛け、このネットワークが稼働して、松の植樹が実現した。

品川宿の沿道は都市化が進んでいるため、商店や住居が密集している。植樹するスペースが見当たらない。そこで一計を講じた。公園や広場などの公共空間に植えるだけでなく、民間所有のマンションあるいは駐車場の一角にも植えることにしたのだ。品川宿では新しくマンションが建築される際、土地の一角に松を移植するスペースを設けることを建築の条件にしている。区や同協議会は、将来、すべての東海道五十三次の宿場町から松を譲り受けて植えたいという目標を掲げている⁸⁵。

石畳や街路灯の整備にも触れたい。電柱の地中化工事や石畳の舗装は 2009 年に行われた。品川宿交流館の改修にあわせて、旧東海道の街並みを再現したと修景工事が進められた。国土交通省の社会資本総合交付金事業として行われ、事業費は全体で 2300 万円だった。

店舗のファサード整備も実施されている。宿場町らしい外観を施すため、2010 年に区が制定した景観条例のなかで、品川宿は区内で唯一の重点地区に指定された。このほか、歩道整備（石畳化）、電柱の地中化なども行われている。

3-6 食文化の復活

品川宿で行われている食文化の復活の代表格は、品川蕪（かぶ）である。品川蕪は、長さ 20 センチメートルほどの大きさで、長カブの一種だ。将軍家に献上されていたほどの名産であった⁸⁶。江戸時代、品川宿周辺で栽培されていたが、明治期以降は徐々に生産数が減っていった。東海道商店街に立地している八百屋「マルダイ」経営者の大塚好雄は⁸⁷、築地市場の関係者から江戸野菜の伝承を聞いた事をきっかけに、途絶えてしまった野菜の復活を試みた。都内の大学の教員と一緒に調査を進め、江戸時代の農書『成形図説』の記述にたどり着いた。そこで、品川蕪を発見した。古来の品種が東京近郊の農村で依然として継承されていることを知り、種を入手して品種改良に努めた。その結果、2009 年に品川蕪を復活させた。自らの店で販売するとともに、地域の小学校約 30 校で育てる活動を続けている。収穫した品川蕪は、学校給食に使われることもある。

⁸⁵ 筆者による、旧東海道品川宿まちづくり協議会まちなみ整備プロジェクト担当交流事業担当・長谷山純への聞き取り（2017 年 11 月 28 日実施）。当初は五十三次だったが、現在は京一大坂の宿場町 4 つを含めて、東海道五十七次と呼んでいる。

⁸⁶ 筆者による、八百屋「マルダイ」経営者の大塚好雄への聞き取り調査（2017 年 12 月 6 日実施）

⁸⁷ 大塚は北品川一丁目町内会の会長を務めているほか、品川神社の氏子総代などを歴任して、地域のリーダーの一人である。

このように品川宿に名産の野菜があるのは、2つの理由がある。1つには、参勤交代の大名行列が品川宿を通る際、地元の名産野菜の種を入手できたからだ。2つには、品川宿を通る街道の西側に田畑が広がっていたからでもある。蕪のほか、米や粟等の五穀、大根などの野菜が栽培されてきた歴史があった。1669年（寛文9）に品川用水が開かれて以降、江戸野菜の栽培が盛んになり、採れた野菜は宿場町近くの青物横丁にあった市場や江戸で販売されていた。

品川産の江戸野菜としては、1843年（天保14）の地域の記録が残された古文書『宿方明細書』（1643年）には品川蕪（かぶ）、大井にんじん、品川葱、居留木橋（いるきばし）南瓜、戸越の筍などが品川周辺の名産野菜として紹介されている⁸⁸。品川蕪自体、今から50年ほど前まで、栽培され流通していた。

一方で、海の幸にも恵まれていた。江戸湾で収穫された鮮魚の一部は、将軍家に献上されたこともあったと伝えられている。江戸時代から生産されてきた「品川海苔の佃煮」はその好例である。品川宿が海に面していたことから、周囲では漁業が盛んだった。特に、養殖海苔の一大産地でもあった⁸⁹。しかし1962年を限りに全面的に漁業権を放棄し、翌63年から海苔の養殖が幕を閉じた。現在は魚屋「品川宿 魚仙」だけが福島県産の海苔を取り寄せ、独特の方法で佃煮を製造。自らの店において1個360円で販売するほか、毎年11月から3月まで品川宿交流館に卸して販売している。

以上のように、まつり、風景の修景、食文化をめぐる各物語は、江戸時代のオリジナルとは変容しつつも、再構築されながら、地域のシンボルとして伝わっている。

⁸⁸ 品川区立品川歴史館（2011）「品川歴史館解説シート No.14」品川区立品川宿歴史館。

⁸⁹ 1670-80年代に、品川で海苔養殖法が発明された。安藤（歌川）広重の『東海道五十三次』にも品川浦で海苔製造の風景が描かれている。しかし1962年を限りに全面的に漁業権を放棄し、翌63年から海苔の養殖が幕を閉じた。

第4章 川崎宿における風景文化の再現

本章では、川崎宿で行われた風景文化を再現する取り組みに注目する。まず、川崎宿の歴史と遺跡について紹介し、風景文化を保全する活動の歴史の変遷について述べていく。川崎宿で実施された活動のうち、「拠点施設の設置」「まつり文化の創出」「修景の取り組み」「食文化の復活」の実態について詳述する。

川崎市は、人口 150 万 5307 人（2017 年 12 月 1 日現在）である⁹⁰。東京都大田区と神奈川県横浜市に挟まれている。市内には 7 つの区があり、川崎宿が置かれているのは川崎区である。戦前から工業都市として発展した地域と認知されている。

4-1 川崎宿の歴史と遺跡

(1) 川崎宿の歴史

川崎宿は、1623 年（元和 9）に江戸・日本橋から数えて 2 番目の宿場として開かれた。品川宿と神奈川宿の間で伝馬による負担を軽減する目的があった。場所は、JR 川崎駅から徒歩 5 分のところにあり、距離は多摩川に架かる六郷橋から小川町までの約 1.5km に渡っている。川崎宿は川崎大師の参詣などにも利用されたため、人の往来は盛んであった。

宿場内には、新宿町の「兵庫（田中）本陣」、「惣佐衛門（佐藤）本陣」の 2 軒の本陣が置かれていた⁹¹。田中本陣は六郷川（現在の多摩川）の渡船権を譲り受け、宿場の財政を立て直した。一方の佐藤本陣は、14 代将軍・徳川家茂が京に上る際に利用した話が残されている。この佐藤本陣は詩人の佐藤惣之助の生家でもある⁹²。

川崎宿には、多い時に 62 軒の旅籠が立ち並んでいた⁹³。宿場内には万年屋、会津屋、新田屋などの旅籠や茶屋が存在していた。数ある旅籠の中でも、「万年屋」が有名だ。米国総領事ハリスや皇女和宮も同旅籠で宿泊した逸話が残る⁹⁴。本来、徳川幕府の要人らが宿泊する施設は本陣である。ところが、江戸後期には、川崎宿にある本陣の財政が逼迫していた。そのため、万年屋のような旅籠が本陣の代替機能を担っていた、と伝えられている⁹⁵。同旅籠は、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』にも登場している。

川崎宿は江戸時代から幾度もの火災に遭い、宿場町の歴史を伝える多くの建築物や資料は消滅した。その後も、地域は災害や空襲の影響を受けることとなる。まず、1923 年（大正 12）に発生した関東大震災では、建物が密集する市街や工場地帯が激しい被害を受けた。全倒壊した住

⁹⁰ 川崎市 HP「川崎市の世帯数・人口、区別人口動態、区別市外移動人口（平成 29 年 12 月 1 日現在）」
<http://www.city.kawasaki.jp/170/page/0000093163.html>（最終閲覧日 2017 年 12 月 25 日）

⁹¹ 田中本陣、佐藤本陣に加えて、「惣兵衛本陣（中の本陣）」も存在していたが、江戸時代後期に廃業している。

⁹² 佐藤惣之助（1890－1945）、神奈川県川崎市出身の日本の詩人。代表作には「六甲おろし」「青い背広で」「人生劇場」がある。

⁹³ 建設省関東地方建設局監修，ニッセイエプロ株式会社編集（1992）『東海道見聞録』建設省関東地方局，pp.40-41.

⁹⁴ 東海道かわさき宿交流館内に設置されている解説板、及び配布資料に基づく。

⁹⁵ 東海道かわさき宿交流館内に設置されている解説板、及び配布資料に基づく。

宅は、7374戸を数えた。そして、1945年（昭和20）には太平洋戦争による空襲の被害を受けた⁹⁶。空襲による市内の破壊は甚大で、川崎宿一帯の建物は消失している。一方で、川崎宿周辺地域は、京浜工業地帯の中心地として発展した。

（2）川崎宿の遺跡

川崎宿には、宿場町の面影を残す建物や町並みは存在しない。なぜなら、火災、震災、空襲、工場の密集などの理由で消失したからだ。ところが、川崎宿にも江戸時代から継承されてきた構造物が残っていた。それは、道（道路）である。東海道の道筋が江戸時代から変化していないのだ。江戸時代の宿場を示した地図と、現在の川崎宿を映した航空写真を比較した⁹⁷。すると、道の曲がる角度に大きな変化が無い点を見ることができる。

道に関する特徴はもう一つある。現在でも、川崎宿内の道は微高地に残されているのだ。東海道の微高地に設置された理由は、防災の観点であった⁹⁸。近くを流れる多摩川が氾濫した時、道や宿場町の被害を防ぐ目的で、微高地へ宿場町が設置された。このため、川崎宿の標高は周辺に比べると少し高くなっている。川崎宿が微高地に設置されている点について、東海道かわさき宿交流館の館長である青木茂夫は「（川崎）駅前から川崎宿へ向かうにつれて登り、川崎宿から区役所へと向かうにつれて下っていくような、山なりの道が川崎宿には残されている。現在でも、ここは微高地の痕跡を感じることができ、貴重なのだ。」と語った⁹⁹。そして、補足するように、同館の副館長である小笠原功は「何も残っていない中、道だけは残っていることが大切だ」と力強く語った¹⁰⁰。また、小笠原は、「昔は道路を『旧道』と呼んでいたけど、今では『東海道』と呼ぶように変わってきた」と道に対する思いも述べた¹⁰¹。

道のほかにも、宿場内には貴重な歴史を伝える構造物が残されていた。1960年に発見された芭蕉の句碑には、まさに“掘り起こされた”遺跡なのである。地元婦人会が町内の美化清掃中に、草に埋もれて、角も欠けていた状態の句碑を発見したのだ¹⁰²。刻まれていた文字を調べたところ、松尾芭蕉の句が記された句碑であることが判明した¹⁰³。松尾芭蕉が俳句を詠んだオリジナル

⁹⁶ 川崎市川崎区 HP「川崎区の歩み」 <http://www.city.kawasaki.jp/kawasaki/page/0000025620.html>
（最終閲覧日 2017年12月25日）

⁹⁷ 東海道かわさき宿交流館が配布するパンフレットに掲載されている。

⁹⁸ 館長の青木茂夫は川崎市の大師出身の市職員で、以前は川崎市アートセンターの館長を務めた。その経験が買われて就任した。筆者による、東海道かわさき宿交流館館長・青木茂夫への聞き取り調査（2017年8月10日実施）

⁹⁹ 筆者による、東海道かわさき宿交流館館長・青木茂夫への聞き取り調査（2017年8月10日実施）

¹⁰⁰ 副館長の小笠原は川崎市に生まれるが、その後秋田に疎開し戻ってきた経験を持つ。大学で法学を学び、大学卒業後は広告代理店の勤務などを経て、市職員に転じた。文化室主査のとき、川崎宿内に設置されている歴史案内板事業に携わった経験を持っている。筆者による、東海道かわさき宿交流館副館長・小笠原功への聞き取り調査（2017年8月10日実施）

¹⁰¹ 筆者による、東海道かわさき宿交流館副館長・小笠原功への聞き取り調査（2017年8月10日実施）

¹⁰² 東海道かわさき宿交流館（2013）『これから ここまで 東海道川崎宿交流館』東海道かわさき宿交流館、pp.6-7.

¹⁰³ 句碑にしるされていた文字は次の通り。「麦の穂を たよりにつかむ わかれかな 芭蕉」。江戸にあった深川の庵を出た芭蕉が、見送りに来た門人たちに向けて、川崎宿のはずれで詠んだ句であった。東海道かわさき宿交流館（2013）『これから ここまで 東海道川崎宿交流館』東海道かわさき宿交流館、p6.

な場所に設置されており、人々は貴重で価値のある句碑だと認識した¹⁰⁴。句碑の発見は、地域住民が川崎宿周辺の歴史や文化に関心を持つきっかけとなった¹⁰⁵。

すでに姿を消した施設や歴史的イベントなどがあった場所には、歴史ガイドらが案内標識や当時の伝える記念碑などを設置した。しかし、これらは文化財に指定されていない¹⁰⁶。

4-2 川崎区による取り組み

本節では、初めに、川崎市が取り組んできた宿場町を活かしたまちづくりの歩みについて概観する。そして、このような取り組みが行われるようになった背景について述べていく。

まず、川崎区が宿場町の歴史を初めてまちづくりの文脈で捉えるようになったのは、1997年の『区民のまちづくり宣言』（川崎区づくり白書）中でのことである¹⁰⁷。この時、区の狙いとしては、東海道の歴史を地域活性化に役立てることがあった。そして、2000年には、区が川崎宿ウォークと第1回東海道川崎宿ボランティアガイドの育成講座も開講した。2001年には「大川崎宿祭り」が開催され、地域内外の人々に川崎宿の魅力や価値が共有された。同祭りには、前年に区が実施したボランティアガイド養成講座の参加者も関わっていた。詳しくは、第4節で述べていく。

盛況に終わった「大川崎宿祭り」は、行政職員や地域住民らの歴史を活かしたまちづくりの意識を高めた。2002年には、町内会・まちづくりクラブ・観光ボランティアガイド等で「東海道川崎宿を活かした地域活性化方策検討委員会」が結成された。この委員会には、地元町内会、商店街、まちづくりクラブ、かわさき大師観光ガイドの会が参加し¹⁰⁸、東海道川崎宿を活用するための活動が決められた。同委員会は2003年、住民らの声を受けて、市民提案書「東海道川崎宿2023 いきいき大作戦」をまとめた。このなかで16の市民アイデアを提案した¹⁰⁹。具体的には、町並みの整備、拠点施設の設置、名物・名産品の開発である。このあと、区は市民提案事業としてこれらの施策と取り組んだ。

2011年には、同委員会がそれまでの活動を踏まえて、新たな提案書「東海道川崎宿2023 いきいき大作戦 第貳巻」を策定した。この提案をもとに区は2013年に東海道かわさき宿交流館をオープンさせた。

なぜ区や住民らは、川崎宿で歴史を活かしたまちづくり活動を促進しようとしたか。話は2001年の「大川崎宿祭り」にさかのぼる。住民主体の実行委員会による主催だった大川崎宿祭りは、1601年（慶長6）、徳川家康が宿駅制度を定めてから400周年にあたる記念事業で、祭りの運営

¹⁰⁴ 筆者による、東海道かわさき宿交流館館長・青木茂夫への聞き取り調査（2017年8月10日実施）

¹⁰⁵ その後保存会が組織されたり、説明板が設置されたりと、地域住民らが句碑周辺の整備を行っている。

¹⁰⁶ 市の歴史的資産としては認められている。

¹⁰⁷ 筆者による、東海道かわさき宿交流館館長・青木茂夫への聞き取り調査（2017年8月10日実施）

¹⁰⁸ かわさき大師観光ガイドの会現在のNPO法人かわさき歴史ガイド協会のことである。

¹⁰⁹ 東海道川崎宿を活かした地域活性化方策検討委員会（2003）『東海道川崎宿2023 いきいき大作戦』川崎区役所区政推進課を参照した。

には 3000 人の地域住民が参加し、来場者は 14 万人を記録した。実際のところ、川崎宿の成立は 1623 年（元和 9）であり、厳密に言えば 400 周年ではなかった。しかし、東海道の多くの宿場町にとっては記念すべき年であり、東海道の歴史を顕彰する機運が高まっていた。各宿場町でイベントが開催されていた。このように東海道に対する注目が高まっている状況を逃す手はない、と行政や地域住民が考え、祭りの実行委員会を発足、400 周年記念イベントを開催したのだった。

同祭りは、川崎宿が歴史のある地域であるという事実を、地域内外に発信する絶好の機会になった。宿場町の風情が残っていない川崎宿の関係者は五十三次の 1 つであることに誇りを持った。

同祭りを契機にして、行政職員と地域住民の間に目標の共有がなされた。目標とは、1623 年の川崎宿設置から 400 周年にあたる 2023 年に、まちの賑わいを取り戻そうということである。

4-3 かわさき宿交流館の開設

川崎宿をめぐるまちづくりは、川崎区のまちづくり推進部地域振興課が地域に密着した施策を行い、建物建築など多額の予算を有するものは川崎市が担当することになっている。

川崎市が川崎宿の整備に乗り出した施策の 1 つとしては、「東海道かわさき宿交流館（以下、交流館）」の設置が挙げられる。建設費 10 億 2000 万円を投じ、2013 年 10 月に開館した¹¹⁰。用地は同市水道局旧川崎営業所分室の跡地である。設置条例に基づく「公の施設」なので、指定管理者には川崎市文化財団・川崎市観光協会グループが選定されている。

交流館の入館料は原則無料となっている（一部の有料企画展示を除く）。川崎宿の歴史的資源は火災や震災、空襲等によりほとんど残されていないが、交流館では川崎宿に関連して残る記憶と記録を掘り起こしながら、多くの市民に川崎宿の存在をアピールする造りだ。

地上 4 階建ての交流館の 1 階は、交流・休憩スペースとなっている。入口近くに川崎宿でも著名だった旅籠「万年屋」をイメージして、畳の休憩スペースを設置した。腰を掛けて東海道や川崎宿に関する映像を眺めることができる。靴を脱いで上がると足を伸ばすことも可能だ。副館長の小笠原は「街道歩きや外国人旅行者や地域住民らが、ふらっと立ち寄って少し話して帰る。宿場らしさが出ていると思う」と語った¹¹¹。

2 階の常設展示スペースは、川崎宿に特化した展示をしている。東海道の町並みが描かれた床の上には、川崎宿にまつわる施設や逸話が映像資料として設置されている。これは交流館開館に合わせて作られたオリジナルなものだ。奥には、旅の衣装を着て記念撮影できる場も用意されている。また、同フロアにはかわさき歴史ガイド協会のガイドボランティアが 2-3 名常駐し、川崎宿にまつわる展示の解説を行い、人々と交流している。また 2 階の奥には、旅の衣装を着て記念撮影できる場も用意されており、外国人観光客の誘致を強く意識している。

¹¹⁰ 筆者による、川崎区への電話調査（2016 年 12 月 26 日実施）

¹¹¹ 筆者による、東海道かわさき宿交流館副館長・小笠原功への聞き取り調査（2017 年 8 月 10 日実施）

3階は常設展示スペースと企画展示スペースを併設する。常設展示は川崎市全域の歴史を紹介している。企画展示スペースでは、東海道や川崎宿に関する展示も催される。2017年8月10日に筆者が訪れた際には、同市内にある民間文化施設の砂子資料館から移設された浮世絵の展示が開かれていた。

4階には多目的集会室と事務室が設置されている。同館の開館時間は原則9時から17時までだが、多目的集会室だけは21時まで開館しており、住民らが会議を開くこともできる。事務室には会議室とボランティアガイドの部屋が併設されている。4階にはテーブルと椅子が置かれ、簡易のスペースが設置されているので、人々の集いの場となっている。

用地には駐輪場が建設される予定だった。しかし、東海道の宿場町を活かしたまちづくりを目指す住民らの活動が展開され、「川崎区に東海道が通っていることが一目でわかる拠点施設をつくりたい」との要望の声が地元から上がった。2009年には地元市民ら7957人の署名が集められ、市側は交流館開館に向けて動き始めた。

企画展の運営費は、市からの指定管理料や事業費に加えて、寄付金も得ている。開館時、住民や地元企業などから595件、約3500万円の寄付が寄せられた。行政に頼るばかりでなく、開館を要望したからには自分たちも協力しなければ、と考えて支援した。寄付金は企画展の運営費用として用いられている。開館後の現在も寄付は続いており、交流館の運営を支援する思いは引き継がれているのだ。

4-4 まつり文化の創出

2001年は節目の年だった。東海道の各宿場町では開設400周年を記念したイベントが相次いで行われており、川崎宿においても2001年5月1日—6日の間、「大川崎宿祭り」が開催された。祭りの来場者は14万人で、運営の参加者だけでも3000人を超えた。交流館館長の青木茂夫は「当時の川崎において、市民レベルで開かれた中では最も大きな祭りだった」と振り返った¹¹²。

同祭りが実現できた背景には、地元住民らの熱情があった。中心人物として、関係者が口をそろえて名前を挙げたのが、同交流館名誉館長を拝命する斎藤文夫である¹¹³。同祭り実行委員会会長で、参議院議員も務めた。

1928年（昭和3）、斎藤は川崎宿近くにあった足袋製造・雑貨販売店「藤村屋」に生まれた。子供の頃に詩人の佐藤惣之助に出会い¹¹⁴、頭を撫でられた経験を持つ¹¹⁵。斎藤は幾多の災害、空襲により宿場の面影がなくなってしまったことを憂い、川崎宿の歴史的価値を地域内外に知っ

¹¹² 筆者による、東海道かわさき宿交流館館長・青木茂夫への聞き取り調査（2017年8月10日実施）

¹¹³ 1928年生まれ。元神奈川県議会議員、参議院議員。川崎の観光に寄与したとして、2006年に国土交通省から「観光のカリスマ」と認定を受けている。

¹¹⁴ 佐藤惣之助（1890—1942年）は日本の詩人。代表作に、「六甲嵐」「赤城の子守唄」がある。佐藤は川崎宿の佐藤本陣に生まれている。

¹¹⁵ 筆者による、東海道かわさき宿交流館・廣岡への聞き取り調査（2017年8月10日実施）

てもらいたいと、大川崎宿まつりの開催を提案した。自ら企画・実行してプロデューサー役を引き受けた。

同祭りのなかでも、特筆されたイベントは2つあった。1つは、川崎宿を代表する旅籠「万年屋」の復元が行われたことである¹¹⁶。旅人らで賑わうかつての万年屋の風景は、長谷川雪旦の『江戸名所図会』に収められている。万年屋とは、六郷の渡し場に近い場所で営業していた旅籠であった。会場には宗三寺の参道を用いた。万年屋の建物やセットは松竹衣装の協力を得た¹¹⁷。建物の内部では、万年屋の名物である奈良茶飯が1日200食限定で販売され、内部に設けられた席で食べられるようになっていた。接客するスタッフは揃いの法被や着物を着て、江戸時代の雰囲気づくりに務めた。後述するように、この奈良茶飯は話題になった。

2つには、江戸時代によく知られていた「六郷の渡し」が再現されたことだ¹¹⁸。これは安藤（歌川）広重『東海道五十三次 川崎』の浮世絵で描かれている、川崎宿の名物だ。東京都と川崎市の間に流れる多摩川は、長雨や大雨が降った際、大洪水に見舞われた。1600年（慶長5）に六郷大橋が架けられたが、1688年（元禄元）には大洪水で流されてしまう。以来、架橋されることはなく、1874年（明治7）まで、船による渡しが続けられた¹¹⁹。

興味深い逸話が残されている。1729年（享保14）にベトナムから来た象を船で渡らせたというのだ。ときの八代将軍・徳川吉宗に見せるための行程途中だった。象を渡した方法は、長船を縄で結び、船をつないで橋状にして、その上を象が歩いて渡ったという。従来の伝承では、使った船の詳細ははっきりしていなかったが、地域の郷土史家らが古文書を調べた結果、「荷足船」と呼ばれた大きな船で渡らせたことを新たに発見した¹²⁰。この際、船の運航には多摩川漁業組合が協力した。

以上のように大川崎宿祭りの開催は、地域に2つの変化を生んだ。1つは、川崎宿の歴史的価値を認識したことである。川崎宿とベトナムの象、あるいは歴史的な偉人である徳川吉宗の関係などを知るとき、人々は川崎宿がかけがえのない歴史的な文化資源であることを痛感した。

2つには、人々の交流が生まれたことである。多摩川の渡しや旅籠の再現にも人員が必要だったように、祭りの運営には3000人の手が必要だった。企画や実施のために何度も話し合いが続けられ、人々は共通認識を有するようになった。3000人の運営スタッフのなかから、このあと市民提案が出されるようになっていく。

4-5 修景の試み

歴史的建築物がまったくなくなった川崎宿における修景の取り組みは、他の2つの事例に比

¹¹⁶ 2001年5月2-3日の2日間の開催であった。

¹¹⁷ 東海道宿駅制定四百年記念大川崎宿祭り実行委員会（2002）『2001 東海道宿駅制定四百年記念大川崎宿祭り記念誌』東海道宿駅制定四百年記念大川崎宿祭り実行委員会.を参照した。

¹¹⁸ 2001年5月3-5日の3日間で実施された。

¹¹⁹ 明治元年には、明治天皇が船橋を渡っている。

¹²⁰ 筆者による、東海道かわさき宿交流館副館長・小笠原功への聞き取り調査（2017年8月10日実施）

べて特徴的がある。それは、人々の頭の中で東海道宿場町のイメージを再現してもらおうという試みを展開していることである。具体的には2つの取り組みが挙げられる。1つは同交流館の展示であり、2つには砂子の里資料館の開館と浮世絵ギャラリーや記念碑の設置だ。

まず、交流館2階の床には川崎宿の風景が描かれている。本陣のあった場所、旅籠の場所、道の曲がり具合などがイラストとして再現されている。館長の青木茂夫に狙いを尋ねると「当時の川崎宿がどのようなものであったか、イラストで再現した。川崎宿の面影が実際に残っている訳ではないが、宿場にどのような家々が連なっていたのか？ どのような道筋になっていたのか？を実際に体験して感じてもらえれば」と語った¹²¹。実物がないだけに、工夫を重ねている。

そして、私設の文化施設である砂子の里資料館の開館である。先述した「大川崎宿祭り」が2001年に始まった際、祭りの実行委員長を務めた斎藤が、私費を投じて同資料館を開館させた¹²²。以前から、旧東海道沿いに面していた自宅の一部を、「大川崎宿祭り」の事務所として提供していた。その後、新たに江戸時代風のなまこ壁の建物外壁を自等の敷地内に新築した。なまこ壁は1つの場所しかないが、たとえ1つでも見た人々が頭のなかでイメージを増幅させ、江戸時代の町並みを感じ取ってもらいたいという狙いがあった。また、同資料館では、斎藤自身が収集した浮世絵を無料で公開している。

ほかにも地元商店街では、店舗のシャッターに浮世絵のプリントを掲げる運動が進められている。これは市が商店主に依頼した事業で、現在まで18枚を掲げた。川崎宿が2023年に宿場開設400周年を迎えるため、行政と市民が協働する修景の取り組みである。また、川崎市では東海道筋に13本の記念碑を建立した。御影石を用いたもので、かつての横丁の名前や本陣跡を伝える。地域に伝わる地名や呼び方が失われていくことを懸念した。2001年には、「万年横丁・大師道跡」と書かれた碑が建っている。万年横丁は、六郷の渡し跡から川崎大師へ向かう道の中で、医王寺までの道のことを指していた。廃れてしまった歴史的な道の名称を次代に継承する狙いがある。

4-6 食文化の復活

川崎宿で実現した食文化の復活は2つある。1つは、奈良茶飯の復活である。地元の老舗和菓子屋「東照」の店舗内でも食べられる。お椀で提供されており、シジミ汁と奈良漬けが付いてくる。1つ520円で販売されている。茶飯とはいうものの、実際はおこわであり、定食あるいはおやつとして販売されている。「東照」は同交流館の隣にあり、日ごろから川崎宿をPRするために提携している。茶飯も提携の一環で、両者が協力して開発した。

交流館でも、1階の土産物コーナーでテイクアウト商品の1つとして販売されている。同館の

¹²¹ 筆者による、東海道かわさき宿交流館館長青木茂夫への聞き取り調査（2017年8月10日実施）

¹²² 同館は館長の斎藤が高齢のため、2016年9月17日以降、休館となっている。毎日新聞「今月で休館へ 17日まで最後の企画展 浮世絵公開し15年、作品は別団体に寄託」2016年9月9日（神奈川県版）

1階では映像資料が流れており、その映像の中で奈良茶飯について言及している。交流館職員の話では、交流館を訪れた市民や観光客が映像を見て、「奈良茶飯はどこで食べられるの？」と質問されることがあったので、交流館に隣接した隣で営業する「東照」に協力してもらい、商品を開発して販売してもらおう運びとなった¹²³。

奈良茶飯とは、江戸時代の川崎宿にあった旅籠料理屋「万年屋」で振る舞われていた料理だった。川崎宿の名物で、『東海道中膝栗毛』のなかで主人公の弥次・喜多が珍しそうに食べる話が掲載されている。地元の郷土史家たちの調査に基づくと、坂本龍馬らの尊王攘夷志士たちも食べたと考えられている。かつては地元ホテルや給食などで限定的に振る舞われることもあった奈良茶飯だが、一般市民にはなじみは薄かった。

何とか復活させたいと考えた地元郷土史家が、古文書から奈良茶飯の記述を見つけ、レシピを探し出した¹²⁴。古文書の記述では、米よりも雑穀の割合が多い。しかしレシピに従って調理すると、現代人の趣向には合わなかった。そこでおこわを用い、現代風のアレンジを加えた奈良茶飯を開発した。このため名称は「奈良茶飯風おこわ」となっている。

2つには、三角おにぎりである。川崎宿では、三角おにぎり発祥の地であるという伝承がある。江戸幕府の第八代将軍に就任するため、紀州を旅立った徳川吉宗一行が、江戸城に向かう途中、川崎宿で宿泊した。その際に、徳川家の家紋の三つ葉葵（あおい）に見立てて三角に握られた3個のおむすびを振る舞われたという言い伝えが残されている。以後300年にわたり、江戸時代の川崎宿の名物となっていた。この話は、御紋むすび伝説として伝えられている。

同館副館長の小笠原は「坂本龍馬が奈良茶飯を食べたという伝承がある。三角おむすびも吉宗が食べたと言い伝えられてきた。地域のみなさんが言い伝えてきた歴史には、本物かどうかとは別に、十分な価値がある」と話し¹²⁵、まちづくりに取り入れていきたい考えを見せた。

以上からは、宿場町の文化の復活には、坂本龍馬や徳川吉宗ら、著名な人物が関わっていた物語が欠かせないとの示唆を得た。

¹²³ 筆者による、東海道かわさき宿交流館館長青木茂夫への聞き取り調査（2017年11月15日実施）

¹²⁴ 筆者による、東海道かわさき宿交流館館長青木茂夫への聞き取り調査（2017年11月15日実施）

¹²⁵ 筆者による、東海道かわさき宿交流館副館長・小笠原功への聞き取り調査（2017年8月10日実施）

第5章 保土ヶ谷宿における風景文化の再現

本章では保土ヶ谷宿で行われたまちづくりについて論じていく¹²⁶。まず、保土ヶ谷宿の歴史と残されている遺跡について紹介し、宿場まちづくりの変遷について述べていく。保土ヶ谷宿では1980年代から宿場まちづくりが開始され、現在まで続いている。保土ヶ谷宿で実施されたまちづくり活動のうち、「拠点施設の設置」、「まつり文化の創出」「修景の取り組み」「食文化の復活」の実態について詳述する。

保土ヶ谷宿は神奈川県横浜市保土ヶ谷区に置かれていた。保土ヶ谷区は人口20万5291人¹²⁷、面積21.81平方キロメートルの行政区である。1901年から区内の一部が横浜市に編入する形で合併が進められ、1927年に保土ヶ谷区が設置された。同区は市の中央部に位置し、関東ローム層からなる多摩丘陵の南東の端にある。

5-1 保土ヶ谷宿の歴史と遺跡

(1) 保土ヶ谷宿の歴史

保土ヶ谷宿は、幕府に認められた旧東海道の宿場として1601年に誕生した。江戸の日本橋から数え得ると、品川、川崎、神奈川に続く4番目の宿場であった。同宿場の主な役割は、荷物の運搬であった。運搬に際しては、宿場周辺の助郷村から人手を借りて行われた。そのため、周辺地域の政治、経済、文化の中心として発展した。宿内には軽部家の本陣1軒、藤屋、水屋、大金子屋の脇本陣3軒、そして旅籠が50-60軒ほど立地していた¹²⁸。

1859年（安政5）の横浜港開港を契機に、街の中心が関内を始めとする都心部へ移動し始めた。また、明治時代に入ると鉄道が建設され、荷物の運搬を担っていた宿場町としての役割は終わりを迎えた。加えて、横浜・関内地域へのアクセスの良さから、山手の居留地が埋まり、住宅を求めていた外国人らが保土ヶ谷宿周辺へ移り住んできた¹²⁹。東海道の宿場町として栄えていった保土ヶ谷宿は、横浜の都心部の地位となり、次第に寂れていった。大正初期から、帷子川沿いに工場が進出し、保土ヶ谷宿周辺は工業地域となった。戦中には、進出していた工場の一部が、軍需工場として生産していた。このため、第二次世界大戦での空襲の被害は大きかった。戦後、工場が閉鎖や移転したことで、工場跡地は住宅地と変わっていく。戦後はベットタウン化が急速に進み、今では区内にはマンションが立ち並ぶ。

(2) 保土ヶ谷宿の遺跡

¹²⁶ 保土ヶ谷は、「程ヶ谷」や「保土ヶ谷」と表記されることもあるが、本稿では横浜市が「区の設置並びに区の事務所の位置、名称及び所管区域を定める条例」で定めていることから、便宜上「保土ヶ谷」と表記することとする。

¹²⁷ 横浜市 HP「横浜市統計ポータルサイト 保土ヶ谷区」

<http://www.city.yokohama.lg.jp/ex/stat/ward/hodogaya.html>（最終閲覧日 2017年12月25日）

¹²⁸ 設省関東地方建設局監修、ニッセイエブプロ株式会社編集（1992）『東海道見聞録』建設省関東地方局、pp.36-37.

¹²⁹ 筆者による、横浜市都市整備局都市デザイン室・小田嶋鉄朗への聞き取り調査（2015年12月2日実施）

現在、保土ヶ谷宿に残されている建物は、旅籠 1 件と本陣跡の門のみである。このほか、同宿に残された権太坂、旧帷子橋跡、境木地蔵境内の 3 件が、市の史跡に登録されている。保土ヶ谷駅西口商店街を抜ける道路は東海道の幅員を現在も残している。

道の幅員もさることながら、保土ヶ谷宿の特色は道の形状である。江戸時代に道筋の付け替え工事が行われた結果、江戸時代の東海道としては珍しかった「L 字型」の道が出現した。この形状は現在にも引き継がれており、この人工的な道こそが、保土ヶ谷宿が他の宿場と異なる点である。地元住民らの自慢となっている。

遺跡が少ないのには 2 つの理由がある。1 つには、鉄道の影響である。鉄道が整備されると、機関車から排出される煙のために、遺された江戸時代の建築物に煙の火種が移って火災になった。旅籠や土蔵も燃えたり、壊されたりした。2 つには、軍需工場が立地していたこともあり、太平洋戦争時に米軍の空襲を受け、甚大な被害だった。多くの建物に加え、街道沿いに植えられていた松並木も焼けてしまった。

数少ない遺跡ながら、品川宿や川崎宿に比べると、旅籠や本陣跡の門が残されていたことは貴重だった。このため、1985 年、地域アイデンティティの再構築を求めた横浜市職員あるいは保土ヶ谷区職員らが保土ヶ谷宿の勉強会を始めた。この時期、同区政推進課が、区内に存在している歴史的資産を一覧にまとめている¹³⁰。

5-2 保土ヶ谷区による取り組み

保土ヶ谷宿に関する組織的な取り組みの最初は、1985 年に行われた区職員らによる保土ヶ谷宿の歴史文化の勉強会である。この勉強会をきっかけに、「保土ヶ谷の活動の原点」である「保土ヶ谷宿四〇〇倶楽部（以下、四〇〇倶楽部）」が誕生し、その後のまちづくり活動が展開していった。同倶楽部の活動に影響を受けた商店街が主催して 1990 年に「保土ヶ谷宿場まつり」を開催した。現在は保土ヶ谷宿を代表するイベントに成長している。この四〇〇倶楽部は会員の高齢化を理由に 2011 年に解散した。しかし翌 2012 年には同組織を母体にして新たに「ほどがや人・まち・文化振興会」が設立された。

行政の動きに目を転じてみよう。区は 2000 年、宿場内の旧帷子橋跡にモニュメントを設置した。安藤（歌川）広重の『東海道五十三次 保土ヶ谷』で描かれている橋で、地元ではよく知られている。1964 年 7 月には帷子川の河川改修工事で大きく川筋が変えられことに伴い、解体された¹³¹。橋の位置も移動された。そこで旧帷子橋の跡地は現在の天王町駅前公園の一部になった。

区は 2005 年、宿場内の境木という地域に、武相国境モニュメントを設置した¹³²。場所は武蔵

¹³⁰ 旧東海道保土ヶ谷宿歴史の道整備計画策定プロジェクトチーム（1987b）『旧東海道保土ヶ谷宿歴史の道整備計画報告書 その 2』保土ヶ谷区役所区政推進課に掲載されている。

¹³¹ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2016 年 2 月 17 日実施）

¹³² 読売新聞「武蔵と相模の境木再現 保土ヶ谷区と住民協働 町の歴史再認識を」2005 年 5 月 11 日、

国と相模国の国境である。さらに区は2007年、国道1号沿いに32本の松を植樹して、松並木を復元した。

なぜこのような組織ができたのだろうか。当時、保土ケ谷区では、地域を象徴する特徴や魅力的な個性が乏しく、区固有のアイデンティティを確立するような顕著な風景、区民性などが見当たらないという悩みを抱えていた¹³³。そこで、まちづくりの方向性として、保土ケ谷区の特徴である保土ケ谷宿の歴史性を生かし、区民が誇れるような魅力をまちに付加したいと考えた¹³⁴。保土ケ谷がどのような地域なのか、十分に捉える必要があるとして、保土ケ谷区・横浜市両職員が参加して勉強会が開かれた。ワークショップ方式を採用し、会の名称を「保土ケ谷塾」とした。

「保土ケ谷塾」は、1985年10月24日—12月4日まで計7回、週に1回のペースで開かれていた。参加者は区職員10名、市職員8名であった。他にワークショップを企画した職員（当時、保土ケ谷区区政推進課課長）1名、コンサルティング会社のスタッフ3名が関与していた。自主的に参加した職員もいれば、研修として参加した職員もいた。7回の「保土ケ谷塾」の中には、まちに出向き、地域に住む住民らにインタビューする回もあった。その際に、旧東海道保土ケ谷宿の街道沿いに住む住民らと、行政職員らの交流が生まれた。

この勉強会では、数少ない遺構ながら、旅籠や本陣跡の門が残されていたことが確認された。勉強会は後に地域住民らも加わり、1987年の地域史『東海道保土ケ谷宿とまちづくり』の発行につながった。

5-3 まちかど博物館の開設

保土ケ谷宿内で展開している「まちかど博物館」について詳述する¹³⁵。保土ケ谷区は「歴史を活かしたまちづくり」の一環として、「まちかど博物館」の事業を実施している。2007年に策定された「歴史まちなみ基本構想」に基づき、2008年3月からスタートした。「地域住民間、地域住民と来街者間の交流機能を育て、巡り歩いて楽しめるまちを創る」ことを目標としている¹³⁶。

まちかど博物館は単独の施設ではなく、東海道周辺に残されている希少な歴史的建造物や商店で、店舗内やショーケース内の一角にスペースを設けて行われている。そのスペースには、保

朝刊。

¹³³ 旧東海道保土ケ谷宿歴史の道整備計画策定プロジェクトチーム（1986）『旧東海道保土ケ谷宿歴史の道整備計画報告書』保土ケ谷区役所区政推進課，p12.

¹³⁴ 旧東海道保土ケ谷宿歴史の道整備計画策定プロジェクトチーム（1987a）『旧東海道保土ケ谷宿歴史の道整備計画報告書』保土ケ谷区役所区政推進課，pp.16-42.

¹³⁵ 保土ケ谷宿には、交流機能を持つ「旧東海道保土ケ谷宿お休み処」も存在している。保土ケ谷町自治会館の分室を活用した施設であり、保土ケ谷区と保土ケ谷町自治会が連携して運営している。内部では、旧東海道に関する書籍やパネルなどが展示されている。この他にも、旅姿の衣装を着用や飲み物の用意がされ、街道歩きをする人の利用が想定されている。しかしながら、当該施設の開館は2017年10月9日のことであり、毎週日曜日みの開館である。本研究では継続年数が少ないため、調査対象から除外している。

¹³⁶ 横浜市保土ケ谷区（2007）『歴史まちなみ基本構想』横浜市保土ケ谷区，pp.40-44.

土ケ谷や宿場町に関する資料、生活文化に関する資料やなりわいの技術等を伝える道具が展示されている。現在、同事業には地域の商店ら 10 館が協力している。

協力店には、保土ケ谷の「ほ」の字が彫られた木製のサインが掲げられ、小豆色をしたのぼりも立てられている。WEB や公民館等で入手可能となっている地図には、長年保土ケ谷宿の歴史を活かしたまちづくりに関わってきた村田啓輔の絵が利用され、手作りの温かい雰囲気が伝わってくる¹³⁷。博物館巡りをする人々は、サインやのぼりを目印に向かうようになっている。店主が館長となり、訪ねてきた人々の対応に努める。店の歴史や個人の体験など、保土ケ谷にまつわる話を聞くことが可能だ。

東海道保土ケ谷宿に関連した展示を行っているのは、「宿場そば 桑名屋」だ。店主の近藤博昭は、保土ケ谷宿の歴史を活かしたまちづくり活動のリーダー的存在であった。趣のある建物は、歴史を感じさせる雰囲気が残る。しかし、蕎麦屋の建物は 1991 年に建てられたものだ。宿場町らしさを出すため、江戸時代末期の船宿を再現している¹³⁸。江戸時代の風情を醸す歴史的建造物の少ない保土ケ谷宿では、希少な建物となっている。店舗の 2 階には座席があり、その周りを安藤（歌川）広重の『東海道五十三次』の浮世絵が取り囲むように壁に飾られていた¹³⁹。

浮世絵以外にも、地元の小学生と四〇〇倶楽部が共同で制作したジオラマも展示されている。このジオラマは、江戸時代の宿帳や本陣である軽部家の文書に基づき、宿場町の町並みが再現されている。「あの道のここらへんに旅籠があつて、茶屋があつて、とみんなで発見しながら作るのは楽しかった」と、近藤は当時を回顧して話す¹⁴⁰。

保土ケ谷区には郷土資料館が存在しないこともあり、桑名屋の 2 階には保土ケ谷宿に関する資料の保管場所にもなっている。興味を示す人には、近藤が資料を見せながら説明もする。「保土ケ谷宿のことを知りたければ、まず桑名屋へ行ってください」と真っ先に名前が挙がるほどで¹⁴¹、保土ケ谷宿を代表する場となっていた。

また、旧道沿いに建っている「ゑびすや 軽部商店」は 1947 年に創業した酒屋だ¹⁴²。店内のショーケースの中や棚には、酒屋の古道具や昔の町並みを写した写真等が展示されている。しかし、同店舗はまちなみ博物館の設置を渋っていた経緯がある。四〇〇倶楽部がお願いに出向き、

¹³⁷ 村田啓輔は、かつて、保土ケ谷で歴史を活かしたまちづくり活動を先導していた「保土ケ谷宿四〇〇倶楽部」に在籍していた。村田の趣味の 1 つに絵を描くことがあり、地域の建物や風景を描き貯めていた。筆者による、村田啓輔への聞き取り調査（2015 年 11 月 26 日実施）

¹³⁸ 釘は使われておらず、深川江戸資料館の船宿を建てた大工職人による再現であるとのこと。筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭との聞き取り調査（2015 年 11 月 26 日に実施）

¹³⁹ 近藤の親戚に摺師がいるため、浮世絵は文献をコピーしたものではなく、版画で刷られたものである。筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2015 年 11 月 26 日、及び 2016 年 2 月 17 日実施）

¹⁴⁰ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2016 年 2 月 17 日実施）

¹⁴¹ 筆者による、横浜市保土ケ谷区区制推進課・村上卓也への電話での聞き取り調査（2016 年 2 月 10 日実施）

¹⁴² ゑびすやのルーツは江戸時代の旅籠「恵比須屋」にある可能性があり、同旅籠は本陣と外川神社の間にあつたと推測されている。

納得してもらった。オープン後は次第に色々な人が店舗を訪れ、写真を見せながら会話もするようになった。最近は保土ヶ谷宿の活動にも前向きになるという変化が見られている¹⁴³。

5-4 まつり文化の創出

1990年に第1回保土ヶ谷宿場まつりが開催された。まつりの開催は、30代—40代前半の若手商店主19人の親睦会「保土ヶ谷ホット会」がきっかけだ。当時はバブル崩壊後で、商店街の衰退が見られ始めていた。商店街や地域全体で賑わい創出が求められ、それは保土ヶ谷においても例外ではなかった。同会設立2年目に入ると、自然発生的にイベントによる賑わいづくりの話題になり、「保土ヶ谷宿場まつり」の開催はトントン拍子にまとまっていった¹⁴⁴。

イベントの企画に関してはある程度の目途が立ってはいしたが、肝心の運営費用がない状態であった。そこで、同会メンバーが中心となり、運営費用の確保に向けて動いた。同まつりの中心人物であった近藤は、「A4の用紙に企画書を書いて、持って、説明に行った。費用も人も自分たちで集めた。いい経験だった」と当時をの様子を語った¹⁴⁵。このような活動を続けていると、区内に進出している大手不動産会社等の民間企業から運営費を獲得した。行政からも支援を受けることが叶った。第1回保土ヶ谷宿場まつりは横浜市から300万円の助成を受け、運営事業費は約1000万円が集まり¹⁴⁶、1990年10月6—7日に開催した。JR保土ヶ谷駅周辺の5つの商店街が中心となって行ったものだった。2日で5万人もの来場者を計上した。

翌1991年10月5—6日に、第2回保土ヶ谷宿場まつりが開催した。昨年の保土ヶ谷宿場まつりが想像以上の盛況だったことが背景にある。新たに3つの商店街の参加も決まった。また、第2回からは横浜市に加えて神奈川県からも助成を得ることができた。このため、保土ヶ谷区全体のイベントという位置づけに変わった。

イベントを通じて新たに2つの交流が生まれた。1つには、他の宿場町の住民との交流だ。第2回保土ヶ谷宿場まつりでは、保土ヶ谷宿と同じ旧東海道の宿場町である静岡県島田市から15名がまつりの協力を駆け付けた。島田宿からの応援者らは大名行列を模したパレードの中で、島田帯に太刀をつけた奴の姿を披露したという¹⁴⁷。また、「保土ヶ谷宿場まつり」の開催後、住民らは他の宿場町へ積極的に訪ねるようになった。その結果、他の宿場町でも保土ヶ谷と同様に、秋口に住民らが主体的に運営する宿場まつりが開催されるようになることであった¹⁴⁸。

¹⁴³ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2016年2月17日実施）

¹⁴⁴ 近藤博昭（1998）「東海道という財産を持つ保土ヶ谷のまちづくり」『調査季報』横浜市，136号，pp.40-43.

¹⁴⁵ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2016年2月17日実施）

¹⁴⁶ 日経流通新聞「宿場まつりで活性策 横浜・保土ヶ谷の商店街 区役所もイベント」1991年7月1日，朝刊.

¹⁴⁷ 朝日新聞「漂う『宿場』の風情 保土ヶ谷宿場まつり始まる」1991年10月6日，朝刊.

¹⁴⁸ 近藤博昭（2004）「歴史と文化に根ざした保土ヶ谷の街づくり」『もっと知りたい保土ヶ谷』保土ヶ谷区政推進課，pp.35-39.

2つには、近郊の観光地から保土ケ谷へ訪れる観光客との交流である。イベントの企画者である近藤は、「こんな小さい街だから身動き取れなくなるの。保土ケ谷駅から人が溢れちゃって。近隣からも来るの、鎌倉だよ。鎌倉なんて、こちらから観光にこちらから行くところでしょ。それなのに、鎌倉からも来るし、厚木からも来るし、あっちこっちから来る。東京からも来るし、すごい人になっちゃって」と当時を懐古して、誇らしげに語っていた¹⁴⁹。

以上のような多様な地域外の住民らとの交流は、地域に対する誇りの形成に繋がった。結果として、保土ケ谷宿の歴史的町並み保全に影響を与えていたと考える。

5-5 修景の試み

保土ケ谷宿で行われていた代表的な修景の取り組みには、①モニュメントの設置、②松並木・一里塚の復元の2つが挙げられる。順に詳述していく。

(1) モニュメントの復元

2000年に、帷子橋跡へ設置されたモニュメントは、浮世絵に基づいている。安藤（歌川）広重の『東海道五十三次 保土ケ谷』には、帷子川に架かる帷子橋の上を行き来する旅人の場面が描かれている。浮世絵に描かれた場面のため、保土ケ谷宿を代表するイメージとも言える。保土ケ谷宿を流れる帷子川は、神戸から天王町にかけて屈曲していた。1964年の河川改修工事により、川筋を大きく変更した¹⁵⁰。現在の帷子川は、当時の場所よりも北を流れている。この時、帷子橋も場所を移して架け替えられ、旧帷子橋の跡は天王町駅前公園となった。その後、1980年代後半から盛り上がりを見せた保土ケ谷宿の歴史的価値を活かしたまちづくりの活動の中で、旧帷子橋跡を保土ケ谷宿のシンボルとして再現させる案が上がった。

2000年に行われた下水道整備の際に、帷子橋のモニュメント設置が行われた。宿場内に流れる帷子川は、かつてはモニュメントが存在している場所を流れていた。浮世絵や文献への記述が見られる場として、保土ケ谷宿を代表する場として知られているため、復元させたい気持ちがあった。四〇〇倶楽部が働きかけて設置が実現した。

(2) 松並木・一里塚の復元

2005年から2007年に行われた「ヨコハマ市民まち普請事業」で、失われた松並木・一里塚等の復元が行われた¹⁵¹。同事業では32本の松並木と一里塚を復元させた。新たに創出された土地への復元となったため、当時に植えられていた場所から数百メートルほど異なる土地への復元となった¹⁵²。一里塚も十分なサイズのものが作れなかった。とはいえ、東海道を象徴する2つ

¹⁴⁹ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく。(2016年2月17日実施)

¹⁵⁰ 横浜市保土ケ谷区で開催された連続講座に参加して得た情報(2015年11月26日参加)

¹⁵¹ 同事業は身近なまちの整備に対し、企画から合意形成、整備、維持管理までをすべて市民主体となって取り組む事業である。2005年から始まった新規事業で、2回の選考を経て、同事業は第1期目に採択された。横浜市都市整備局(2007)「ヨコハマ市民まち普請事業事後評価」横浜市都市整備局を参照した。

¹⁵² 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会会員への聞き取りに基づく(2015年11月26日実施)

のシンボルの復元は、保土ケ谷区の新たな歴史スポットとなった。

松並木の復元には多様な主体が関与している。まず、四〇〇倶楽部と保土ケ谷区との関わりがあった。狩場インターを直結するための拡幅工事により、公共空間が生まれた。区としては、新たに生まれた空間を区民のために活用したいと考え、四〇〇倶楽部に相談した。その際に、東海道沿いなだから用地の周辺には松並木があったはず、松並木を植えてはどうか、との意見が出た¹⁵³。区職員らは、ハード整備に対し最高 500 万円までの助成金を交付する「ヨコハマ市民まち普請事業」であれば、松並木の復元が可能になると考え、住民らに提案した。職員らの勧めもあり、2 団体が協力して市に事業の提案を行った。

過程では、地元の小学校である横浜市立岩崎小学校の教員や生徒らの関与もみられた。小学校の教員の中に郷土史に関心をもつ人がいたことが、関与のきっかけである¹⁵⁴。事業を提案するコンテストのプレゼンテーションでは、小学校の生徒らも登場させた寸劇を行った。「審査委員の方の受けがよく、プレゼンには困らなかった」と近藤は語った¹⁵⁵。

「東海道保土ケ谷宿松並木プロムナード実行委員会」は、四〇〇倶楽部と共に事業を提案した団体である。同委員会は、事業終了後に「保土ケ谷宿松並木プロムナード水辺愛好会」と名称を新たに設定し、現在も松並木の美化活動や月に 1 度松並木のそばを流れる今井川の清掃、年に一度の水質調査も行っている¹⁵⁶。「道がきれいになれば、川もきれいになろうと思った」と語るように、松並木の復元活動と同時に河川の清掃が始まった¹⁵⁷。活動を通じて、普段顔を合わせない地域住民らに交流が生まれている。加えて、それまで地域の歴史文化や環境に興味を示さなかった住民らが、関心を持ってくれるようになったと話す¹⁵⁸。このように、松並木の復元をきっかけとして多様な主体の関与が確認された。

保土ケ谷宿を象徴する 2 つの修景の取り組みは、保土ケ谷区の新たなシンボルを生み出した。

5-6 食文化の復活

保土ケ谷宿で行われている食文化の取り組みについて詳しく述べていく。浮世絵に基づいて運営されている「宿場そば」、東海道の疲れを癒す茶屋で提供された名物「ぼた餅」の再現の 2 つを取り上げる。

安藤（歌川）広重の『東海道五十三次 保土ケ谷宿』の場面には、帷子川に架かる新町橋の上を旅人が行き来しているところが描かれている。この絵では、新町橋のたもとには建物が連なっ

¹⁵³ 筆者による、横浜市保土ケ谷区区制推進課・村上卓也（2016年2月12日実施）及び、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2016年2月17日実施）

¹⁵⁴ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2016年2月17日実施）

¹⁵⁵ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2016年2月17日実施）

¹⁵⁶ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会会員への聞き取りに基づく（2015年11月26日実施）

¹⁵⁷ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2016年2月17日実施）

¹⁵⁸ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会会員への聞き取りに基づく（2015年11月26日実施）

ており、一番手前の建物の外に「二八」と書かれた看板が置かれている。この「二八」とは、二八蕎麦のことを表していると言われている¹⁵⁹。

保土ヶ谷宿には名物蕎麦屋が存在する。「宿場そば 桑名屋」（以下、桑名屋）は JR 保土ヶ谷駅西口から 1 分のところに立地している。現店主の近藤博昭は、保土ヶ谷生まれ保土ヶ谷育ちで、1886 年（明治 19）から続く桑名屋の 4 代目だ。桑名屋の名は、初代店主が三重県の桑名出身であることに由来している。近藤は蕎麦屋の店主としての顔だけでなく、一連のまちづくりを先導してきた人物でもある。

近藤が保土ヶ谷宿や地域の歴史に興味を持った背景には、家業である蕎麦屋を継ぐことになったことが関係している。代々続く家業をそのまま継ぐのは嫌だと考えていた。特色ある蕎麦屋にしたいと考えたときに、「どうして保土ヶ谷で蕎麦屋をしているのか？」と思い立った¹⁶⁰。そして、地元である保土ヶ谷の歴史を探り、東海道の宿場町だと知った。

近藤自身が保土ヶ谷宿で蕎麦屋を営む意義を見出した要因は、広重の浮世絵を観たことだ。偶然、蕎麦屋が描かれている浮世絵を見て、近藤は代々続く蕎麦屋に意義を見出し、以降家業を誇りに思うようになった。そして、宿場そばと名前を付けた。近藤は、まちづくりに関わった当手を振り返って、「子供の頃に、ボールをぶつけていた石碑に歴史があることを知って驚いた。まさか、この道を坂本龍馬が通り、自分と同じ石碑を目印に歩いていたなんて」と、語っていた¹⁶¹。

現在、箱根駅伝のコースとして知られている「権太坂」は、かつては東海道の難所として箱根に続いて有名であった。権太坂を登り、富士山を眺めることもできたほど、景色が良かった。権太坂から眺める風景は、葛飾北斎の『富嶽三十六景 東海道 程ヶ谷』にも描かれている。今でも晴れた日には、権太坂から富士山を眺めることが可能だ¹⁶²。権太坂の勾配は今よりも急なものであったこともあり、疲れた旅人たちは周辺に軒を連ねる境木立場茶屋で休息したそうだ。その茶屋の名物が「牡丹餅」や「焼餅」で、旅人たちはご褒美として楽しんだ¹⁶³。

境木地蔵尊から徒歩 1 分の「菓匠 栗山」では、「牡丹餅」を再現して提供している。「菓匠 栗山」は 1978 年に、現店主の栗山順夫が開業した。土地の雰囲気が気に入って、開業した栗山は、土地にまつわるお菓子を販売したいと考えた。牡丹餅を再現した和菓子は「ごんた餅」といい、1 個 170 円で売られている。他にも、地蔵の名前を冠した菓子の販売や、東海道をイメージした菓子箱や包装紙の利用も行う。現在でも東海道を歩く人々のために、店先にベンチ（長椅子）を置いてもてなしている。お休み処として利用する客もいる。

以上のように、個人の情熱により宿場町の歴史に基づいた食べ物が提供されている。

¹⁵⁹ 言葉の由来は諸説ある。

¹⁶⁰ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2016 年 2 月 17 日実施）

¹⁶¹ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2016 年 2 月 17 日実施）

¹⁶² 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会会員への聞き取りに基づく（2015 年 11 月 26 日実施）

¹⁶³ 浅井了意が『東海道の名所記』の中で、焼餅については坂の名称となっているほど有名なものと記しており、江戸時代初期から権太坂周辺の名物であったと考えられている。

第6章 ケヴィン・リンチの思想に基づく分析

本章では、第3章から第5章までに報告してきた事例を、ケヴィン・リンチの都市のイメージを構成する3つの成分で分析した。ここで改めてケヴィン・リンチの思想について触れたい。彼は著書である『都市のイメージ』の中で、都市のイメージは①アイデンティティ (identity)、②構造 (structure)、③意味 (meaning) の3つの成分から構成されると述べている。風景文化の再現が、どのように宿場町のイメージ形成に結びついているのかを考察する。

6-1 アイデンティティ

リンチによると、アイデンティティとは「対象物を他のものから見分けていること」としている。そこで、本研究に援用した場合、アイデンティティとは、「地域住民が宿場町であった価値を認識すること」と考えた。宿場まちづくりの前後で、どのように宿場町の価値を認識していったのか、活動を続けていく中で宿場町に対する価値観の変化がみられたのか、事例別に分析する¹⁶⁴。

(1) 品川宿

まちづくりの活動が始められる以前は、宿場町の歴史が顕彰される機会が無かった。地域住民の間では、宿場町の歴史は特別取り上げる必要がないものとして考えられ、宿場町の名残をとどめる風景は、日常生活の延長線上にある風景として扱われてきていた。地域の核となるような建築物も見当たらなかったため、古臭いだけの特色ない地域という印象であった。

1988年に開催された東海道五十三次シンポジウムへの参加をきっかけとして、参加者の間で東海道品川宿の持つ歴史的価値を認識が行われた。また、品川宿ではまちづくり協議会が設立され、活動に携わるようになった人々から、商店街へと歴史的価値の認識が広まっていった。

宿場町の価値が認識された背景には、シンポジウムに参加したことに加え、翌1989年に品川宿でシンポジウムを開催に向けて準備を行ったことが挙げられる。品川という土地の歴史や文化を見つめ直す機会となったのだ。現在では、地域に対して歴史のある町、宿場町であった歴史が現在まで続く町という認識に変化している。

(2) 川崎宿

様々な要因から、川崎宿では宿場町の歴史を伝える建造物や町並みが破壊され、残されてこなかった。宿場町の風情を感じさせない町並みは、人々に川崎宿が宿場町であった歴史を忘れさせ、歴史のない地域というイメージであったのである。加えて、京浜工業地帯周辺に位置することから、工場周辺の地域という認識が根強く残っている。

1960年に発見された「芭蕉の句碑」は、地域が東海道である歴史を示すものであった。以来、一部の市民らにより歴史に埋もれていた宿場町である歴史や文化に関心が寄せられていく。

市内外への川崎宿の歴史の認識は、2001年の「大川崎宿祭り」の開催を契機に広まっていっ

¹⁶⁴ 事例で取り上げた宿場町では、かねてより地域が東海道の宿場町であった歴史の顕彰は一部の郷土史家や専門的な研究者を除き、行われてこなかった。

た。背景には、宿駅制定 400 周年に向けた東海道の歴史的価値の認識の高まりや歴史を活かしたまちづくりが地域活性化や観光化に寄与する報告が全国各地から上がってきていることにあった。そこで、川崎宿でも歴史を活かしたイベントを企画した。祭りの開催の過程では、川崎宿の歴史や逸話の掘り起こしが行われていた。

一連の取り組みを経て、川崎宿に起きた変化は市民の中に道路を指す呼び名が「旧道」から「東海道」に変わったことだ。東海道という名称を再評価する流れにある。

(3) 保土ヶ谷宿

地域内の江戸時代から続く家系の人においても、地域の歴史には関心はなかった。東海道や宿場町という歴史的価値は、地域社会に埋もれて見えなかったのである。また、1970 年代から 80 年代の都市開発の流れの中で、古い建造物が解体・改築され、工場やマンションに建て替えが行われた。そして、次第に横浜のベッドタウンに変わっていった。そのような状況では、地域に誇れるもの、特色のあるものは何もないという認識であった。

保土ヶ谷宿に光が当てられるのは、1985 年—1987 年頃のことだ。85 年のまちづくり計画策定に向けた勉強会を契機に、1987 年には地元住民と行政が協力し、保土ヶ谷宿に関する文献の整理が行われた。この時の住民らは、宿場町の歴史を活かしたまちづくりを先導する団体を結成した。以降、まつりの開催や修景活動を通じて宿場町の歴史的価値の認識が、地域へ広まっていた。

いずれの地域も取り組みの前は、「古臭い」「歴史のない」「何もない」という、ネガティブなイメージであった。ところが、取り組みが行われた結果、地域の歴史や宿場町の価値を認識するように変化がみられていた。また 3 つの事例に共通していたことは、行政や地域住民が地域に抱くイメージが変化することに伴い、風景文化の再現に取り組む動きが指導していたことであった。

6-2 構造

ここで取り上げる構造とは、宿場町の空間を指すこととする。歴史的建造物や町並みが良好な状態で残されていない地域を事例として取り上げていたが、宿場町のイメージ形成に寄与する貴重な建造物の存在も確認できた。また、新たに造られた建造物の中にも、宿場町のランドマークとなったものもある。残されている建造物と新たに生み出された建造物の 2 つの中から、特にイメージ形成に大きく寄与していた建造物を取り上げ、どのようなポイントがイメージ形成に結びついていたのか述べていく。

(1) 品川宿

品川宿に残されている建造物の中で、特に東海道のイメージに強く結びついていたものは、道（道路）である。品川宿を抜ける東海道の道は、道幅・起伏はそのままに現在まで伝えられている。宿場町時代から変わらないものとして、「文化財的価値のあるもの」という認識が共通していた。江戸時代の歴史的建造物が皆無に近い品川宿において、江戸時代から変わらない道幅・起

伏を有していることが貴重だと考えていた。つまり、江戸時代と現代を結び、宿場町であった証拠となっているのである。「生活環境が変化しても、道だけは絶対に守らなければならないもの」という意見もあった¹⁶⁵。背景には、東海道がまつりの際に利用されている等、人々の生活との関係が強く表れている。また、残されている路地にも名前が付けられていた。「路地があることで、宿場町の雰囲気生まれている」と語っていた。

新たに造られた建造物で、地域が東海道宿場町であると想起させるものには、品川宿交流館の存在が挙げられる。お休み処として地域内外の人に利用される点、まちづくりを先導している団体の拠点施設となっている点より、今では品川宿の顔となっている。

(2) 川崎宿

川崎宿でも、道の形や家の区割りが江戸時代からそのまま残されており、地域の人々は道に戴いて特別な価値を見出していた。交流館の展示物やパンフレットには道についての記述も散見される。副館長である小笠原の「何も残っていないけれど、道だけは残されている」という言葉からは、残されている道が貴重なものであると認識していた。道が盛り上がっていることで、ここが東海道だったというエリアの認識にも役立っていた。

新たに造られた建造物のなかでは、東海道かわさき宿交流館が開館した影響は大きかった。地域で活動するガイドボランティアや郷土史家のなかでは、かねてより東海道沿いに一目で東海道が通っていることが分かる施設の設置が望まれていた。交流館は休憩所を設置し、地域内外の人々が立ち寄れるスペースとなっている。東海道や川崎宿に関する資料を展示する博物館としての機能も有している。現在、交流館は東海道や川崎宿に関連した人やモノが集まるようになっている。交流館は川崎宿のシンボルとして機能している。

(3) 保土ヶ谷宿

保土ヶ谷宿を抜ける東海道の道は、一部の幅員は江戸時代のままであるが、多くは道路の拡張工事に伴って一部手が増えられた部分もある。ところが、拡張された道に対しても、東海道であるという記憶を残すために、松並木や一里塚の復元が行われてた。このように、東海道の道への意識は強い。

東海道の歴史を活かしたまちづくりが行われるようになり、道の幅員もさることながら、「道のかたち」（道の形状）に価値を見出している。元は違うルートを通っていた保土ヶ谷宿の道であるが、江戸時代に L 字型の道へと改修工事が行われ、現在のような人工的で特殊な形が出来上がった。これは、保土ヶ谷宿が他の宿場町との差として認識されている。

保土ヶ谷宿は事例で取り上げた他 2 つの宿場町に比べると、地域内に歴史的建造物が残されていた。加えて、江戸時代を意識して建設された「宿場そば 桑名屋」は、保土ヶ谷が宿場町であったことを視覚的に伝える効果があった。1991 年に建てられた、比較的新しい建造物であるが、外観、内装共に江戸時代の雰囲気が漂っている。宿場町の町並みを再現したジオラマや外部

¹⁶⁵ 筆者による、旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会・佐山吉孝への聞き取り調査（2017年12月3日実施）

への報告に使用したボード等の資料の保管も行われているため、郷土資料館的な役割を担っていた。東海道保土ケ谷宿の歴史を伝える重要な場となっていた。

事例に共通していた構造は、東海道の道（道路）が江戸時代から残されていたことであった。道全体が江戸時代からそのまま保存されているのではなく、多少の変容も行われていた。しかしながら、道幅や起伏、道筋や立地、道の形状のような点が残されていたことは、地域住民らにとって宿場町のイメージ形成に結びついていた。また、新たに建てられた交流施設が、宿場町のシンボルとして認識し始めていた。

6-3 意味

リンチによると、意味とは社会的、歴史的、機能的、個人的な要因としている。本研究では「宿場町に関するエピソード」と言い換えている。このエピソードとは、一時的に失われていたものの、行政や住民らが歴史的価値に気づき、再現を試みたものであった。

エピソードには2つの傾向がみられた。1つには、心象風景を呼び起こすものだ。例えば、浮世絵、古文書、口承伝説、歴史的事実や記憶などを用いていた。2つには、江戸時代の動的風景を呼び起こすものである。江戸時代の宿場町は、文化交流の拠点として幅広い人々が行き交い、活気や賑わいが生まれる場所であった。以下、順に記述していく。

(1) 品川宿

品川宿で行われている街道松の移植では、浮世絵に基づいて宿場町にふさわしい松が選定されていた。江戸野菜の伝承に基づき、古文書から品川蕪を発見した。地域の誇り形成に繋がっていた。

また、「しながわ宿場まつり」で披露される催し物は、東海道や品川宿に由来していた。おいらん道中は、品川宿が歓楽街であった歴史に基づいている。江戸時代から続く呉服店・尾張屋が、装束や休憩場所を提供している。江戸時代の風俗を模した行列も行われ、近隣に住む市民らが参加している。東海道宿場町という歴史的な価値を用いて、地域コミュニティを再生させたい狙いがあった。2日間開催される祭りは、8万人が来場し、地域のにぎわい形成に一役買っている。

(2) 川崎宿

『東海道中膝栗毛』にも登場する、川崎宿を代表する奈良茶飯の再現が行われた。地元の郷土史家が古文書の中から奈良茶飯の記述を発見し、レシピを復活させた。さらに、三角おにぎりに関する伝説の活用も行われている。川崎宿は「三角おにぎり発祥の地」という自負から、レシピコンテストが開催されているのだ。伝説の真正性に関しては、地域住民らで信仰してきた歴史に依拠している。

川崎宿では、2001年に「大川崎宿まつり」を開催した。当時、東海道の制定400周年を記念し、東海道の歴史的価値が認められ始めていた。東海道の宿場町を活かし、地域活性化の起爆剤にしたい考えと、宿場町の復興を願っていた祭り実行委員長の熱意が合致し、開催された。祭りでは、六郷の渡し、万年屋の再現が行われた。祭りの開催は、人々に忘れかけていた川崎宿の歴

史を呼び起こした。祭りは単発の事業であったが、同祭りの開催をきっかけに、東海道川崎宿の歴史を活かした地域活性化方策検討委員会が結成され、拠点整備や修景活動等の活動に繋がっていった。

(3) 保土ヶ谷宿

保土ヶ谷宿では浮世絵に基づき、消滅した橋のモニュメントが設置された。かつて橋が架けられていた場所にデザインを意匠して復元されている。帷子橋は浮世絵に描かれていることもあり、保土ヶ谷宿を特徴づける歴史的建造物であったことが背景にある。加えて、松並木や一里塚の復元も行われた。両者は東海道を象徴するシンボルであり、かつて保土ヶ谷宿に存在していた記録に基づいている。

1990年から「保土ヶ谷宿場まつり」が開催され、現在まで続いている。まつりを開催するきっかけとなったのは、商店街の衰退に伴う賑わいの創出及び、地域コミュニティの再形成が求められていたことだ。若手店主らにより、自然発生的に開催されたイベントとして話題になった。まつりを通じて、他の宿場町と交流が生まれている。加えて、近隣から保土ヶ谷を訪ねる人もおり、地域に対する愛着や誇りの形成に結びついている。

以上より、宿場町の歴史にまつわるエピソードを用いた風景文化の保全が行われ、まちづくり活動に貢献していた。用いたエピソードは、江戸時代をそのまま再現するのではなく、現在の生活や社会に合うように変容が行われていた。

第7章 失われた風景文化を再現する条件

本研究の目的は、宿場町の歴史性を活かした、まちづくり活動の実態を浮き彫りにしつつ、失われた風景文化を再現するための条件を明らかにすることである。前章ではケヴィン・リンチによる「アイデンティティ」「構造」「意味」の3つの視点から分析を行った。本章では上記3つをもとに、浮かび上がってきた条件を述べる。そして最後に、文化財保護法等に対する筆者の見解を述べたい。

7-1 外部への発信

3つの事例に共通して現れていたことは、行政や地域住民が地域に抱くイメージが変化することに伴い、風景文化の再現に取り組む動きが始動したことであった。では、作動するための「引き金」は何だったのだろうか。

品川宿の場合を思い出そう。1988年の「東海道五十三次シンポジウム」だった。行政職員と地域住民が招待を受けて参加し、品川宿の魅力や独自性について指摘を受けた。参加者らを中心として、「品川宿の魅力は何か」との議論が生じ、宿場町に関する意識が共有されていった。

当時の区職員である新美まりは「品川ってどんなまち？ と他の自治体の方に問われたとき、正直言って、何のイメージもなかった」と打ち明けたように¹⁶⁶、地域に対する確固たるイメージは存在しなかった。しかし翌1989年の次回シンポジウムの開催地に立候補して選ばれたことから、「他の宿場町の方々が来るので不格好なことにはできない、と当時思った」と、まちづくり協議会の会長である堀江新三は振り返っている¹⁶⁷。この「不格好なこと」と思った理由は、「何のイメージがないことは恥ずかしく、品川宿のイメージを考えなくてはならない」との外圧を感じたからだ。要するに、1989年のシンポジウムを開催することが、宿場町のイメージを共有する「引き金」になったと分かった。

川崎宿の場合は、2001年開催の「大川崎宿祭り」が「引き金」になった。同祭りには14万人が来場し、運営に関係した市民は3000人に達した。運営は地域住民が主導し、行政職員がサポートした。江戸時代の歴史的建築物がない川崎宿にも貴重な歴史の積み重ねがあるという事実を、市内外の人々に周知させる絶好の機会だった。

祭り実行委員会委員長の斎藤文夫は川崎宿で生まれ、以前から川崎宿の魅力を多くの人に広めたいと考えていた。歴史的な建築物に代わる文化資源を探し、多摩川を超えるための「六郷川の渡し」の歴史的価値を掘り起こした。「渡し跡」の石碑を見て、渡しの風景を再現しようと思いついた。多摩川の漁業組合に協力を依頼して、2日間、船を運行した。有料だったが、乗船チケットは完売したほどの人気になった。

当時の櫓船とは違ったが、江戸時代と同じ場所から多摩川を渡る試みだった。200年ほど前に、

¹⁶⁶ 筆者による、元品川区職員・新美まりへの聞き取り調査（2017年12月6日実施）

¹⁶⁷ 筆者による、旧東海道品川宿まちづくり協議会会長・堀江新三への聞き取り調査（2017年12月10日実施）

この渡船が実際に行われていたことを見る人たちに想像させた。人々がひきつけられたのは、頭のなかで、川を渡る江戸時代の風景が再現されたからなのではないかと思われる。

保土ヶ谷宿の事例では、保土ヶ谷区の郷土史を編纂する取り組みが「引き金」となっていた。1985年のまちづくり計画策定をきっかけに、行政職員と地域住民の勉強会がスタートした。そして、1987年に郷土史の書籍『東海道保土ヶ谷宿とまちづくり』を発行した。同書は区内の図書館に寄贈された。

一連の活動を通じ、地域住民らは地域に豊富な文献資料が残されていることに気づいた。保土ヶ谷区が単なる横浜のベッドタウンではなく、貴重な歴史性があったことを知った。参加した近藤は「この道を坂本龍馬も歩いていたと想像すると、とても不思議な気分で、街道がとても貴重な存在なのだと思った」と打ち明けていた¹⁶⁸。

1985年から1987年の郷土史発行は、行政職員、地域住民が保土ヶ谷宿の歴史や地域に残されている資源の価値に関する認識を改めることにつながった。両者が歴史を活用したまちづくりをしたいという意識を共有していった。

3事例とも、「引き金」になったのは、外部への発信だった。外からのまなざしに応えるために、自らで宿場町の価値を考える必要に迫られた。シンポジウムの開催、イベントの企画、郷土史の出版など方法は多様だが、迫られ方の事情は共通していた。

7-2 地域固有の構造

リンチは彼の研究の中で、「構造」を重要視していた。しかし、本研究では歴史的建築物がない地域を取り上げたため、「構造」が不足しているように思えた。ところが、思わぬ「構造」がクローズアップされた。それは道（道路）である。

例えば、品川宿を通る東海道は道幅、道の起伏や隆起に関して、江戸時代から手が加えられていない。現地調査で出会った人たちは口をそろえて「江戸時代から残っている」と笑顔で、胸を張って答えてくれた。歴史的な価値に気づいている証拠である。

加えて、住民の生活という観点からも道は重要な役割を担っていた。品川宿の道は、幅員7メートルの道が3.2キロメートルに渡って続く。買い物へ向かう主婦、下校中の子供らはその道を行き来する。狭い道であるため、向かいの人の顔が見え、道の端と端で会話ができる距離なのだ。日々のコミュニケーションをスムーズに行うことができ、地域で取り組む祭礼行事やイベントの円滑な運営が可能となっていた。

川崎宿では、土地が少し高くなっている点も住民の誇りにつながっていた。多摩川の氾濫の影響を防ぐために、川崎宿は微高地と呼ばれる周辺に比べると少し高いところに立地しているのだ。このため、駅前から川崎宿を通り区役所へと向かう道は、なだらかな山のような構造だ。昔ながらの道は、東海道の歴史を感じさせ、誇りの気持ちを抱かせている。

¹⁶⁸ 筆者による、ほどがや人・まち・文化振興会・近藤博昭への聞き取り調査に基づく（2016年2月17日実施）

さらに川崎宿の「構造」に関する別の自慢は、道のルートが変わっていない点である。江戸時代と現代で東海道の道筋に大きな変化がなく、道の曲がる角度は 200 年を経ても一緒である。その角度は、かわさき宿交流館が作成したパンフレットでも紹介されていた。

川崎宿を通っている道路は、かつて「旧道」と称されていた。しかし保全活動が進むと、「東海道」と呼ばれるようになったことを、本研究内で紹介した。江戸時代から続く貴重な道であることを、地元住民が確認していた。

保土ヶ谷区の住民たちは、L字型をしている東海道の形状にこだわりを見せている。江戸時代にルートの変更が行われ、人工的な整備が行われたのは珍しい。現在の保土ヶ谷交差点を境に、不自然に屈曲している点に地元の自慢がある。今も残る L字型の形状は、保土ヶ谷宿と他の宿場町を区別する大きな差異である。「おらがまち」を誇りに思う一因となっている。

明治以降、国道一号線の道路拡幅工事が行われ、江戸時代の東海道が完全に残されているわけではない。道路は広げられたが、街道を誇りに思う気持ちから、工事後の歩道に、松を植栽したり、一里塚を再現したりした。一連の活動は、「東海道の道なのだ」というアピールだ。地域住民らが、東海道の歴史の価値を継承しようとしている現れとも言える。

宿場町の保全といえば、本陣や旅籠のような建物に熱い視線が集まっていた。ところが、本研究を通じて、歴史的な道（道路）そのものが、地域にとって特別な価値や意味を有していたことを明らかにした。歴史的な道が残されていることが、住民らの誇り再形成に繋がり、失われた風景文化を生み出す基盤となっていたことを突き止めた。

文化財に指定されていなくても、東海道という歴史的な道は特別な構造物だったのである。地域住民は「東海道の道は文化財的価値がある」との共通認識を持ち、まちづくりの機運が高まっていた道程は、品川宿、川崎宿、保土ヶ谷宿で共通している。

7-3 宿場町をめぐるストーリーの再構築

風景文化を守り伝えたいという感情が人々の間に生まれる条件の 3 つめは、宿場町にまつわる物語や逸話が存在しつつ、再構築されることである。いずれの宿場町にも歴史的なストーリーがあったのだが、変容しながら現代的に修正あるいは加工されていた。

ケヴィン・リンチは、自著『都市のイメージ』で、都市のイメージを形成する 3 つの成分としたうちの「アイデンティティ」と「構造」には多くのページを割いている。しかし、残る 1 つの「意味」にはほとんど触れていない。しかし筆者は、リンチのいう「意味」こそが大切なのだと受け止めている。宿場町でいう「意味」とは、浮世絵などの美術作品、個人の記憶、祭礼、食べ物を巡る伝承などであり、これらを欠くと歴史性という「縦糸」は無くなってしまう。「縦糸」があれば垂直的に過去と現代をつなぐことができる。一方で、同時代の人と人をつなぐ「横糸」の機能も必要だ。歴史をめぐる個人の記憶が集合して共通意識となり、水平的な結びつきが生じる。仲間意識といってもいい。この意識がコミュニティを生む。「縦糸」と「横糸」があれば、形になる。

ところが、ただ「昔のものがあればいい」という訳ではない。研究対象の3事例では「意味」に相当する事象が現代的に加工されていた。例えば、第3章4節で紹介した品川宿のおいらん道中である。本来、歴史的事実では花魁は存在していなかったのに、引手茶屋のあった事実から転じて、「江戸・吉原の花魁を登場させてはどうか」とストーリーが膨らんだ。今では外国人も参加し、沿道には鈴なりの人たちが集まるようになった。地域最大のイベントに成長した。

第5章6節で取り上げた川崎宿の奈良茶飯のことも思い出したい。本来の奈良茶飯は、もち米より雑穀を多く用いていたが、試作してみると現代人の趣向に合わなかった。そこで、おこわを入れて現代風に加工した。

第6章5節で触れた保土ヶ谷宿では、江戸時代にあった旧帷子橋は撤去された。河川の付け替え工事が行われ、コンクリート製の新しい橋が北へ250メートルほど離れた場所に新設された。本来の川は無くなったが、旧帷子橋を模した木造の欄干と橋げたが再現され、元の場所に設置された。地元住民たちが「歴史的風景を残してほしい」と陳情したためである。

以上の事例から、ただ古いものを伝えるだけでなく、古いものを修正や加工しながら再現する取り組みが必要であったと考える。とりわけ、歴史的著名人が登場する事例が目立っていた。川崎宿や保土ヶ谷宿では、坂本龍馬をめぐる言い伝えを見つけることができた。川崎宿では奈良茶飯を食べたに違いないとされ、保土ヶ谷宿では、土佐と江戸を往復する際には「うちの宿場の街道を歩いていただろう」と推測しながら、笑顔で語る住民がいた。偉人たちを思い描くことで、歴史を自分のものにできると思われた。

本論文の執筆を終えつつある今、筆者は、江戸時代の歴史的建築物が存在しなくとも、失われた風景文化の再現は可能であったと言い切りたい。

7-4 文化財保護法の限界

筆者は、以前から、わが国における文化財保護制度に対する疑問を有していた。わが国の文化財保護行政は優品主義であり、優れた有形文化財があることが大前提となる。このため、指定文化財のない地域の住民は、住んでいる誇りを得られにくいのではないか、という問題意識を抱いていたのだ。

文化財保護法は、多様な文化資源を文化財として認めて、保護措置を拡充してきた。ところが、未だにその恩恵が受けにくい部分も存在する。2つの難点があった。1つには、住民がどれだけ貴重だと主張しても、認められない場合がある。指定や登録を行うのは行政であり、上意下達の面がある。地域資源の価値を行政側が気付かなければ、保護策は作動しない。

2つには、日常的に使うものに対する保護には向いていない。現状では建物の現状変更には許可や届け出が必要となっている。快適性を向上させたいと思うときには適していない。菊地・水野(2006)は、わが国の保全制度は対象物の崩壊や消失の高まりが生じた後に、具体的な方策を

成立させてきており、積極的に保全の取り組みがなされてきたとは言い難いと指摘している¹⁶⁹。保護制度が受動的に成立したため、「静的保存」を志向しているのだ。対する「動的保存」では日常的に使い続けてこそ意味があるとされる。

本研究では、この日常的に使う貴重なものの代表格が街道筋の「構造」だった。街道筋の「道」は文化財保護法の保護対象範囲なのだが、現代社会に対応して拡幅等の工事が行われると、保護の対象外になる。東海道を例にとると、文化財保護法が適用されているのは、神奈川県箱根旧街道（埋蔵文化財）と静岡県宇津ノ谷峠（史跡）の2か所だけである¹⁷⁰。明治以降に拡幅工事等、改変が行われている道は指定されていない状況だ。

しかし、本研究の結果、文化財保護法の対象外の風景文化であっても、同法に頼らない保全策が可能であることが浮き彫りになった。そのための前提は、官と民の双方が、失われた風景文化の価値に気づき、大切に守り伝えなければならない、という認識を共有することである。

宿場町の風景は、地域の日常風景として幅広い世代に愛され、共通体験となり得る存在である。コミュニティの崩壊が今日的課題となる今、いっそう注目を集めていこう。

文化財保護法を補うために、景観法や歴史まちづくり法が制定された。これらの法律にはそれぞれ利点もある反面、依然として、優品主義やハード（建物や施設等）重視の印象を受ける。本研究の事例対象に選んだ3つの宿場町のように、建物がなかったり、優品がなかったりする地域は、保全の対象にならず、限界がある。

本当に優品がなかったり、建築物がなかったりしたら、歴史的な資源を活かしたまちづくりは無理なのだろうか。決してそうではない。品川でも、川崎でも、保土ヶ谷でも、人々の熱情を受けて、失われた風景文化が再現されていた。地域に残された文化資源を活かして、3つの条件、すなわち「外部への発信」「地域固有の構造」「物語の再構築」があれば、失われた風景文化を再現する可能性は高まる。

今後は、本研究で取り上げた品川宿、川崎宿、保土ヶ谷宿の3つの事例だけでなく、全国各地にある、もっと多くの宿場町を活かした地域活性化策の推移を見守っていきたい。

¹⁶⁹ 菊池達夫・水野信太郎（2006）「日本各地における伝統的建造物群の保存活用の実態」『浅井学園短期大学部研究紀要』北翔大学，第44号，pp. 117-132.

¹⁷⁰ 筆者による文化庁への電話取材（2017年12月25日実施）

あとがき

東海道の宿場町を研究するようになったきっかけは、学部4年生だった2014年11月に静岡県島田市を訪れ、大井川東岸に位置する島田宿大井型川越（かわごし）遺跡を見学してからである。東西を貫く川越街道には、江戸時代の風景を再現した木造の建物群が並んでいる。人足の溜まり場だった「番宿」（ばんやど）や仲間の宿などの施設20か所は1966年、文化庁から国の史跡に指定された。現在では指定地のうち72%（2016年11月現在）が市に買収されて公有化された。国の史跡なので、土地買収や建物復元の費用は文化庁から補助金が出ている。施設の買い上げは事業費の80%、施設修理は50%が補助される。

しかし、買収された市有地では、公的資金の補助を得たため商売等の営業に制限がある。復元された建物には人が住めず、店舗もできず、夜は暗い。

このような状況を知り、宿場を活用したまちづくりに関心を持った。筆者はもっと宿場の文化資源を活用してカフェや民宿、雑貨店などに活用して、地域住民の誇り形成や観光開発に用いたい、と考えている。あるいは地元への帰属意識を高め、コミュニティ形成にもっと役立てたいと願う。こうした取り組みに対して、一時は、「宿場まちづくり」という造語も考えたほどだ。歴史的な建造物群を塩漬けにして保存するだけでは不十分だと思う一方で、観光客が増えれば建造物群は痛み、風情が薄れてしまう不安もある。難しい問題である。

本論文の執筆の追い込みに入った2017年12月、文化庁の審議会が文化財に関する規制を緩めて、まちおこしなどの事業に活用することを促す答申を出した。今後は、教育委員会の所管だった文化財保護行政が首長部局に移すことも可能になるという。保存に重きを置いてきた従来の方針からすると、大きな転換期を迎えた。少子高齢化で悩む過疎地域が、文化財の活用で活性化することが可能になるのならば喜ばしいことだ。

優品主義の文化財保護や、ユネスコなど権威ある文化機関が認定する上意下達の文化遺産行政について、これでいいとは思わない。しかし、安易に観光やイベントに活用して文化財の価値を損なうことにならないかの不安も残る。文化財の保護や活用の評価が、地域経済への貢献という一点に偏りがちである現状についても、釈然としない気持ちもある。

このように文化財保護行政が揺れ動く節目の時期に、筆者は東海道の宿場を何度も訪れ、現地調査できたことは幸いだった。時機にかなった研究になった。少しは地に足をつけた論議を展開できたと振り返っている。

筆者が取り上げた3つの事例は、京都や鎌倉のように著名な観光地ではない。その現地調査を通じて痛感したことは2つある。1つには、住民たちの熱意である。風景文化を守り後世に伝えることによって、住みやすいまちになるからこそ、町並みや風景文化を継承していた。歴史的価値、学術的価値とは無関係に、地元の誇り形成の大切さを痛感した。

2つには郷土史家の存在である。3事例の地域を踏破した際、まち歩きを案内してくれた郷土史家は外部の地域から宿場町に移り住んできた人たちだった。首都圏への一極集中で移住して

きた人たちが、地縁や血縁を超えて、移住した地域を愛するようになったのだ。コミュニティを形成するけん引役になっているように思えた。人々が入り出る宿場の開放性はこのように現代でも人々を魅了している。

筆者は、文化政策研究科を修了したあと、流通業界に就職する予定である。いわゆるコンビニエンスストアを運営する企業である。江戸時代の宿場は「駅」だったのだが、現代のコンビニも今風の「駅」の1つなのかもしれない。仕事は直接、文化財保護行政に関わる訳ではないが、勤務先の店舗が地域コミュニティ形成の場として何らかの形でお役に立てないかと考えている。

謝辞

修士論文を執筆するにあたり、多くの方々からご指導・ご協力を賜りました。お世話になったすべての方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

旧東海道まちづくり協議会の皆さまには、ご多忙のところまち歩きやインタビューにご協力いただきました。東海道かわさき宿交流館の職員の皆さまにおかれましては、貴重な資料をご提供していただきました。元保土ヶ谷四〇〇倶楽部の皆さまにも、当時の保全活動に関わる貴重なお話をお聞かせ下さいました。また、本稿では取り上げませんでしたが、他にも聞き取り調査にご協力していただいております。貴重なお時間を割いていただき、誠にありがとうございます。そのほか、品川、川崎、保土ヶ谷への訪問時、出会って会話をした方々にも、温かく迎え入れて頂いたこと深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

主指導の松本茂章先生には、学部生の頃からご指導賜りました。学問の奥深さ、研究の楽しさは松本先生を見て学びました。研究が順調に進まない時でも、励ましのお言葉をかけて下さり、感謝しております。また、副指導の田中啓先生には、研究が行き詰った時に、適切なアドバイスを頂きました。心から感謝しております。松本研究室のOB・OGの皆さま、セミ生の皆さま、共に学んだ同期の院生にも、様々な場面で支えていただきました。深く感謝申し上げます。修士論文をきっかけに、様々な方とのご縁ができました。このご縁を大切にしていきたいと思っております。ご支援くださり、誠にありがとうございました。

参考文献

(1) 書籍・雑誌・論文等

・邦語文献

大森洋子・西川徳明「歴史的町並みを観光資源とする地域におけるまちづくりに関する研究—筑後吉井の町並み保存事業を事例として—」『都市計画論文集』日本都市計画学会，35巻，pp.811-816.

岡崎篤行（2006）「これからの都市計画と歴史遺産の保存・再生」大川直躬編『歴史的遺産の保存・活用とまちづくり』学芸出版社，pp.67-112.

片桐新自編（2000）『歴史的環境の社会学』新曜社.

川口友子・糸長浩司・栗原伸浩・藤沢直樹（2003）「心象風景にもどづく明日香の『万葉の風景』づくりの課題」『農村計画論文集』農村計画学会，22巻，pp.49-54.

菊池達夫・水野信太郎（2006）「日本各地における伝統的建造物群の保存活用の実態」『浅井学園短期大学部研究紀要』北翔大学，第44号，pp.117-132.

木原啓吉（1982）『歴史的環境—保存と再生—』水曜社.

建設省関東地方建設局監修，ニッセイエプロ株式会社編集（1992）『東海道見聞録』建設省関東地方局.

国土交通省都市・地域整備局 公園緑地・景観課 景観・歴史文化環境整備室監修，歴史まちづくり法研究会（2009）『歴史まちづくり法ハンドブック』ぎょうせい.

近藤博昭（1998）「東海道という財産を持つ保土ヶ谷のまちづくり」『調査季報』横浜市，136号，pp.40-43.

近藤博昭（2004）「歴史と文化に根ざした保土ヶ谷の街づくり」『もっと知りたい保土ヶ谷』保土ヶ谷区 区政推進課，pp.35-39.

下村彰男（2006）「日本における風景認識の変遷—近代における—自然の風景の発見と価値づけ—」西村幸夫編『都市美—都市景観試策の源流とその展開』学芸出版社，pp.216-233.

品川区（2014）『品川区史 2014 歴史と未来をつなぐまちしながわ』品川区.

品川区教育委員会（1998）『品川の古道』品川区.

武田重昭（2015）「都市風景の中のシビックプライド」伊藤香織・紫牟田伸子監修，シビックプライド研究会編著『シビックプライド 2 国内編】—都市と市民のかかわりをデザインする』株式会社宣伝会議，pp.180-183.

東海道かわさき宿交流館（2013）『これから ここで 東海道川崎宿交流館』東海道かわさき宿交流館.

東海道宿駅制定四百年記念大川崎宿祭り実行委員会（2002）『2001 東海道宿駅制定四百年記念大川崎宿祭り記念誌』東海道宿駅制定四百年記念大川崎宿祭り実行委員会.

中井検裕・小浦久子（2005）「景観法成立を受けて自治体が工夫すべきこと」社団法人日本建築学会編『景観法と景観まちづくり』学芸出版，pp.16-23.

日本建築学会（2004）『まちづくり教科書第2巻 町並み保全型まちづくり』丸善.

萩島哲（1996）『風景画と都市景観—水・緑・まちなみ—』理工図書株式会社.

馬場憲一（2001）「日本における文化遺産の活用と地域づくり—1990年代の文化財政策との関わりのなか

でー』『法政大学現代福祉学部〈現代福祉研究〉創刊号』法政大学現代福祉学部, pp.35-47.

馬場憲一 (2013) 「地域主権実現のための自治体文化財政策について —新たな『文化財』概念の構築を踏まえて—」『現代福祉研究』法政大学現代福祉学部, 第 13 号, pp.1-22.

馬場憲一 (2015) 「『記憶の場』の形成と『歴史的環境』との関わりについて—勝淵神社の柴田勝家兜埋納伝説を事例として—」『現代福祉研究』法政大学現代福祉学部, 第 15 号, pp.153-170.

林口廣・江頭邦道 (1987) 「歴史的町並み保存の展開と課題—自治体に対するアンケートをもとにして—」『法政研究』九州大学, 50 巻, pp.267-284.

文化庁文化財保護部 (1998) 『伝統的集落における歴史的環境整備を中心とした地域活性化方策の調査・検討: 報告書』文化庁文化財保護部建造物課.

三輪修三 (1995) 『東海道川崎宿とその周辺』文献出版.

・外国語文献

Appleyard, D (1969) “ Why buildings are known ” , *Environment and Behavior*, Vol.4, pp.389-411.

Harrison, D.J and Howard, A.W (1972) “ The role of Meaning in the Urban Image ” , *Environment and Behavior*, Vol.1, pp.131-156.

Lynch, K (1960) “*The Image of the City*”, MIT Press. (リンチ・K 著, 丹下健三・富田玲子訳 (1968) 『都市のイメージ』岩波書店.)

Lynch, K (1960) “*The Image of the City*”, MIT Press. (リンチ・K 著, 丹下健三・富田玲子訳 (2007) 『都市のイメージ 新装版』岩波書店.)

Tung, M.A (2001) “*Preserving the World's Great Cities: The Destruction And Renewal Of The Historic Metropolis*”, Three Rivers Press. (タン・M・A 著, 三村浩史監訳, 世界都市保全協会訳 (2006) 『歴史都市の破壊と保全・再生—世界のメトロポリスに見る景観保全のまちづくり—』海路書院.)

(2) 行政資料・パンフレット等

旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会 (1995) 『品川宿周辺まちづくり計画書』品川区.

旧東海道保土ヶ谷宿歴史の道整備計画策定プロジェクトチーム (1986) 『旧東海道保土ヶ谷宿歴史の道整備計画報告書』保土ヶ谷区役所区政推進課.

旧東海道保土ヶ谷宿歴史の道整備計画策定プロジェクトチーム (1987a) 『旧東海道保土ヶ谷宿歴史の道整備計画報告書』保土ヶ谷区役所区政推進課.

旧東海道保土ヶ谷宿歴史の道整備計画策定プロジェクトチーム (1987b) 『旧東海道保土ヶ谷宿歴史の道整備計画報告書 その 2』保土ヶ谷区役所区政推進課.

品川区立品川歴史館 (2011) 「品川歴史館解説シート No.14」品川区立品川宿歴史館.

東海道川崎宿を活かした地域活性化方策検討委員会 (2003) 『東海道川崎宿 2023 いきいき作戦』川崎区役所区政推進課.

横浜市都市整備局 (2007) 『ヨコハマ市民まち普請事業事後評価』横浜市都市整備局.

横浜市保土ヶ谷区 (2007) 『歴史まちなみ基本構想』横浜市保土ヶ谷区.

(3) 新聞記事

朝日新聞「漂う『宿場』の風情 保土ヶ谷宿場まつり始まる」1991年10月6日、朝刊.

日経流通新聞「宿場まつりで活性策 横浜・保土ヶ谷の商店街 区役所もイベント」1991年7月1日,朝刊.

毎日新聞「今月で休館へ 17日まで最後の企画展 浮世絵公開し15年、作品は別団体に寄託」2016年9月9日(神奈川県版)

読売新聞「武蔵と相模の境木再現 保土ヶ谷区と住民協働 町の歴史再認識を」2005年5月11日、朝刊.

(4) WEBサイト

川崎市 HP「川崎市の世帯数・人口、区別人口動態、区別市外移動人口(平成29年12月1日現在)」
<http://www.city.kawasaki.jp/170/page/0000093163.html> (最終閲覧日 2017年12月25日)

川崎市川崎区 HP「川崎区の歩み」

<http://www.city.kawasaki.jp/kawasaki/page/0000025620.html> (最終閲覧日 2017年12月25日)

品川駅南地域の未来を創る推進協議会 HP「概要」<http://shinagawa-mirai.org/outline/> (最終閲覧日 2017年12月25日)

品川区 HP「品川区の統計」

<http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/hp/menu000015000/hpg000014918.htm> (最終閲覧日 2017年12月26日)

横浜市 HP「横浜市統計ポータルサイト 保土ヶ谷区」

<http://www.city.yokohama.lg.jp/ex/stat/ward/hodogaya.html> (最終閲覧日 2017年12月25日)

表 1 東京都・神奈川県内の宿場町

所在地	宿場名	宿場設置	「宿場町」に関する拠点施設	備考	
品川区	品川	1601年	○		
川崎市	川崎区	川崎	1623年	○	
横浜市	神奈川区	神奈川	1601年	×	
	保土ヶ谷区	程ヶ谷	1601年	○	
	戸塚区	戸塚	1604年	△（2014年閉鎖）	
藤沢市	藤沢	1601年	○	門前町	
平塚市	平塚	1651年	×		
大磯町	大磯	1601年	×		
小田原市	小田原	1601年	○	城下町	
箱根町	箱根	1618年	○	国指定文化財	

（筆者作成）

表 2 指定・登録の基準

名称	基準
重要文化財	(一) 意匠的に優秀なもの (二) 技術的に優秀なもの (三) 歴史的価値の高いもの (四) 学術的価値の高いもの (五) 流派的又は地方的特色において顕著なもの (一) — (五) のいずれかに当てはまる建造物
国宝	重要文化財のうち極めて優秀で、かつ文化史的意義の特に深いもの
登録有形文化財	(一) 国土の歴史的景観に寄与しているもの (二) 造形の規範となっているもの (三) 再現することが容易でないもの (一) — (三) のいずれかに当てはまる建造物

（文化財保護法を参考に筆者作成）

表 3 品川区における風景保全の取り組み

西暦	内容
1988 年	東海道五十三次シンポジウムに参加 「旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会」が設立
1989 年	東海道シンポジウムが品川宿で開催
1990 年	第 1 回「しながわ宿場まつり」開催
1993 年	浜松宿、三島宿から松を移植
1994 年	区とまち協が協働で 「旧東海道品川宿周辺整備基本計画報告書」
1995 年	北品川本通りに「お休み処」をオープン
1998 年	青物横丁石畳整備が完了
2000 年	東海道 400 年祭を開催
2006 年	店舗ファサード、石畳、街路灯、などの整備
2009 年	「品川宿交流館」開館 石畳舗装、電線地中化の実施
2010 年	品川区景観計画にて「重点地区」に位置付け

(資料に基づいて筆者作成)

表 4 川崎区における風景保全の取り組み

西暦	内容
1997年	川崎区づくり白書で、まちづくりの観点から川崎宿が取りあげられる
2000年	「東海道川崎宿ボランティアガイド養成講座」開講
2001年	「大川崎宿祭り」開催 「砂子の里資料館」開館
2002年	東海道川崎宿観光ガイド案内標識を設置 「東海道川崎宿を活かした地域活性化方策検討委員会」結成
2003年	「東海道川崎宿 2023年いきいき作戦」完成
2004年	東海道川崎宿を活かした地域活性化推進組織設立
2006年	シャッター浮世絵ギャラリー整備
2009年	「東海道川崎駅歴史資料館設立陳情書」提出
2013年	「東海道かわさき宿交流館」開館
2014年	交流館が「かながわ観光大賞」受賞

(資料に基づいて筆者作成)

表 5 保土ヶ谷区における風景保全の取り組み

西暦	内容
1985年	区職員有志らによる保土ヶ谷宿の勉強会が開始
1987年	地域史『東海道保土ヶ谷宿とまちづくり』の発行 「保土ヶ谷宿四〇〇倶楽部」誕生
1990年	第一回保土ヶ谷宿場まつり
1993年	「東海道五十三次シンポジウム」を保土ヶ谷で開催
2000年	旧帷子橋のモニュメントを設置
2002年	「保土ヶ谷区まちづくり計画」を策定
2005年	境木にモニュメント設置
2007年	松並木・一里塚の復元 「歴史まちなみ基本構想」策定
2008年	まちかど博物館を設置
2012年	「ほどがや 人・まち・文化振興会」(四〇〇倶楽部の後身組織)誕生

(資料に基づいて筆者作成)

図1 東海道・品川宿を抜ける道



(2017年11月27日筆者撮影)

図2 品川宿交流館の外観



(2017年7月26日筆者撮影)

図3 しながわ宿場まつりで披露されるおいらん道中



(2017年9月23日筆者撮影)

図4 品川宿に移植された街道松



(2017年11月27日筆者撮影)

図6 東海道かわさき宿交流館の外観



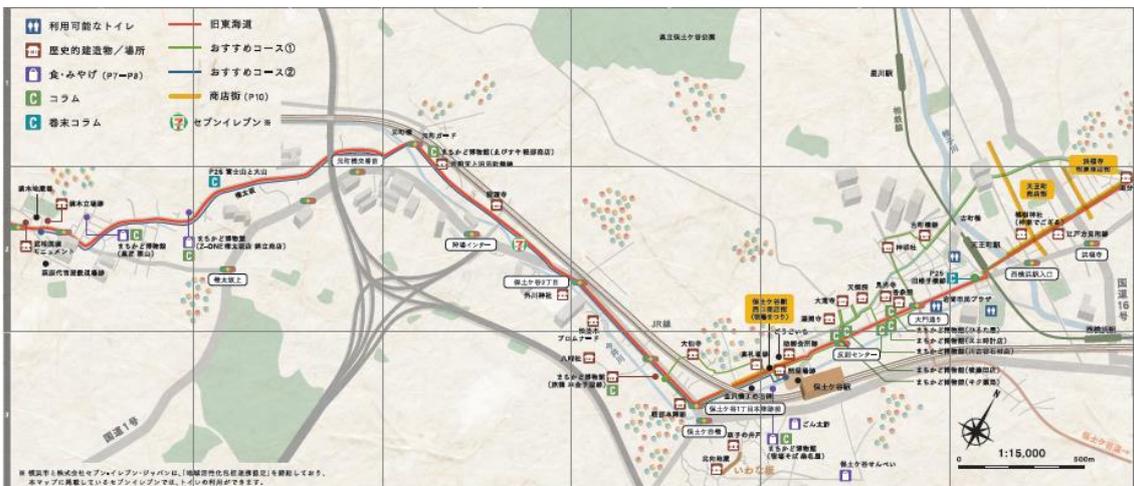
(2017年8月10日筆者撮影)

図7 交流館2階の床に描かれている道



(東海道かわさき宿交流館より提供)

図 8 保土ヶ谷宿の特徴的な道筋



(横浜市に配布するパンフレット「横浜旧東海道 みち散歩」 pp.21-22.より抜粋)

図 9 保土ヶ谷宿に残る旅籠・本金子屋跡



(2015年11月26日筆者撮影)

図 10 まちかど博物館・「宿場そば 桑名屋」の2階の展示風景



(2015年11月26日筆者撮影)

図 11 保土ヶ谷宿場まつりの様子



(2017年10月8日筆者撮影)

図 12 保土ヶ谷宿に復元された旧帷子橋跡モニュメント



(2015年12月2日筆者撮影)

図 13 保土ヶ谷宿に復元された松並木と一里塚



(2015年11月26日筆者撮影)

図 14 桑名屋で提供されている蕎麦



(2015年11月26日筆者撮影)